

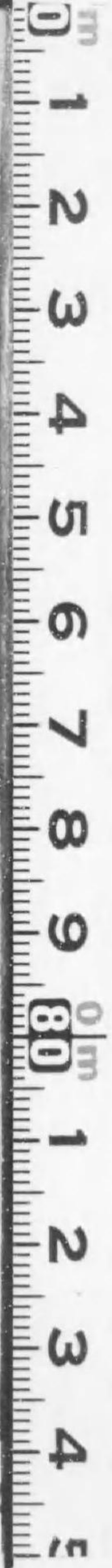
290  
702

瑞月口述

靈界  
物語  
舍身活躍

子之卷

515220

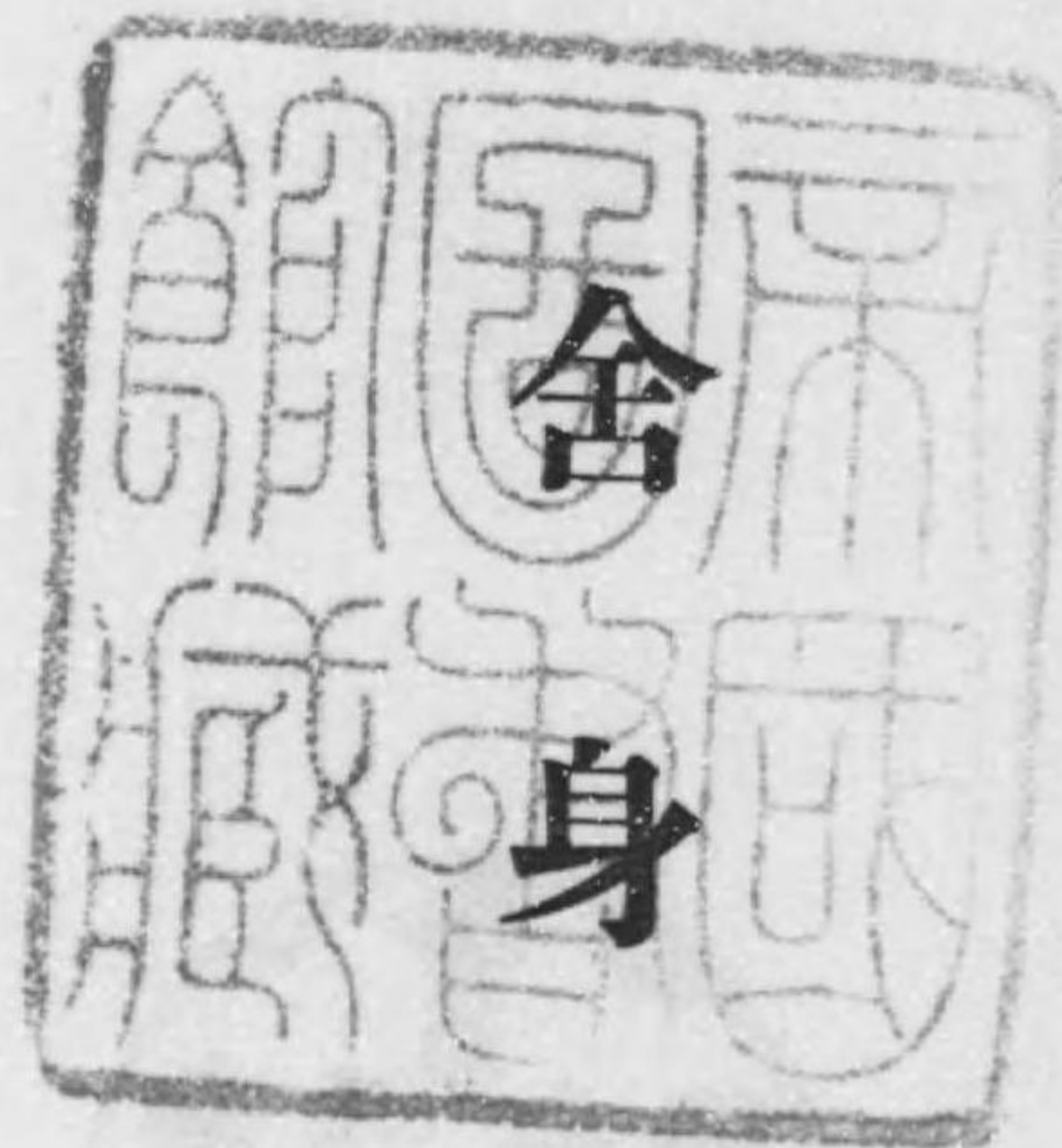


始



特50/  
249

出口瑞月口述



活  
躍

天聲社發行



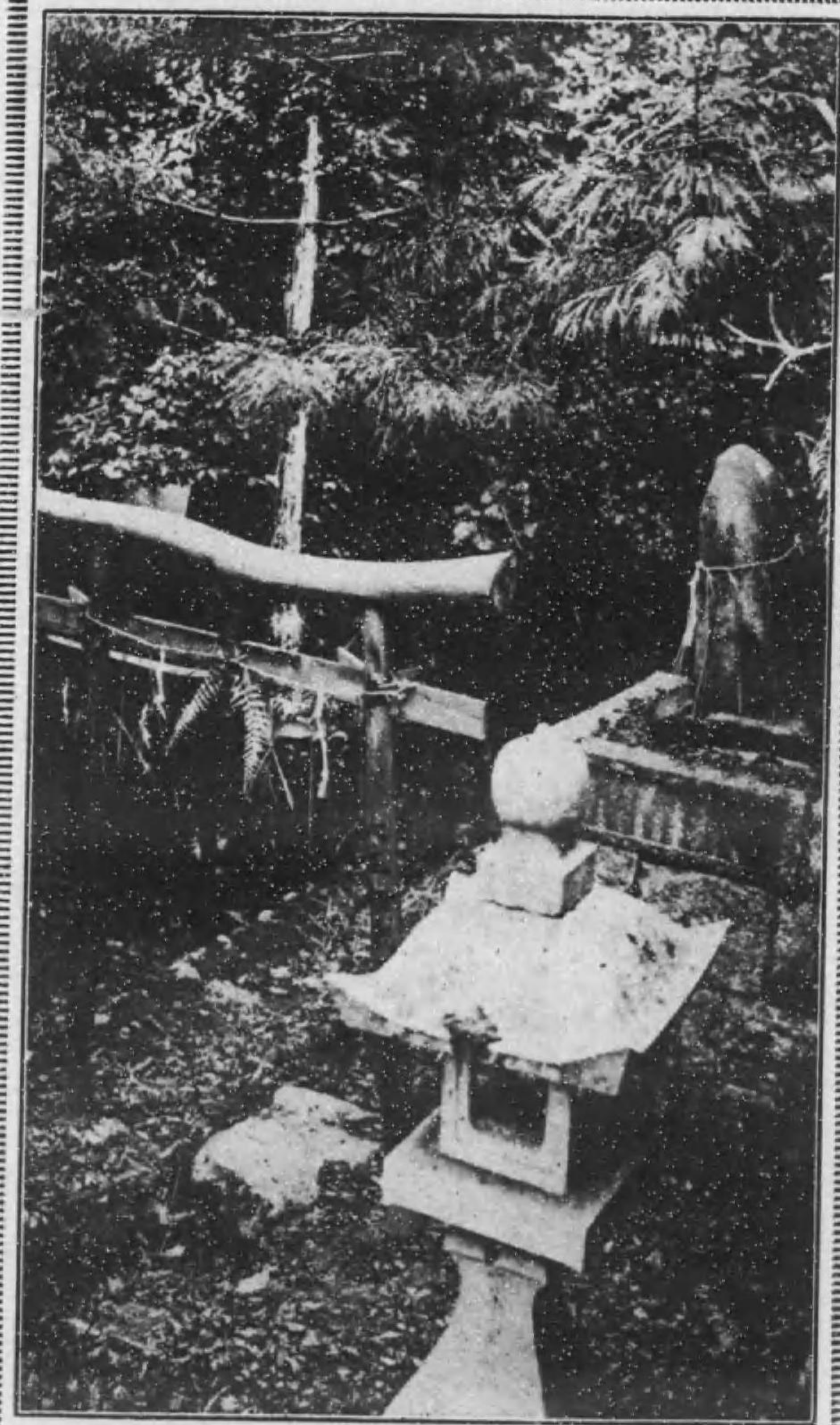
〔靈界物語第三十七卷〕



1094667



瑞月大先生の家



龜岡矢田の瀧

序

靈界物語も凡百の艱難を排除し、漸く三十六卷原稿用紙百字詰四萬五千枚、着手日數百八十日にて完結を告げました。併し乍ら過去、現代、未來に於ける觀、神、幽三界の際限無き物語なれば、到底三輯や四輯にてその大要を述べ盡す事は最も至難事であります。神命に依れば、四万五千枚の原稿即ち四百五十万言の三十六卷を一集（實は三輯）としても、優に之を四十八集口述せなくては、徹底的に解く事は出来ない話であります。そうすれば三百六十字詰四百頁を一巻として一千七百二十八巻を要し、瑞月が記録破りの大速力を以て、一年に三輯づゝ口述するも、今後四十八年を要する譯になります。實に某新聞紙の評する如く阿房陀羅に長い物語でありますから、

神界へ御願致して可成十輯位にし百二十巻位にて神示の大要を口述して見たいと思ひます。就ては瑞月が靈界に仕わたる経路をも豫め述べて置く必要ありと認め、第四輯「舍身活躍」の初に於て、「靈主體從」第一巻（第一篇）に漏れたる穴太に於ける幽齋修行の状況や、綾部に來つて出口教祖に面會し神業に奉仕したる次第をも、略述べて讀者の參考に供する事と致しました。又この「舍身活躍」は「海洋萬里」の繼續的物語で、神素蓋鳴尊が數多の神人を教養し、之を宣傳使として、四方の國々嶋々に遣はし、入岐大蛇へ邪神惡狐の靈魂を言向和し、終に出雲の日の側上に於て、村雲の劍を得て天照大御神に奉り、五六七神政の基礎を築き固め、天下萬民の災害を除き救世の大道を樹立したまひし、長大なる物語であります。ア、惟神靈幸倍坐世。

大正十一年十月十二日

於五六七殿

口

述

者

識

# 舍身活躍【子の巻】目次

序……………頁  
 總 說……………一

## 第一篇 安閑喜樂

|     |          |     |
|-----|----------|-----|
| 第一章 | 富士山…………… | 五   |
| 第二章 | 葱節……………  | 一一三 |
| 第三章 | 破軍星…………… | 一三八 |
| 第四章 | 素破拔…………… | 一五〇 |
| 第五章 | 松の下…………… | 一七〇 |
| 第六章 | 手料理…………… | 一八七 |

第二篇 青垣山内

第七章 五萬圓……………一〇七

第八章 梟の宵企……………一二六

第九章 牛の糞……………一三九

第一〇章 矢田の瀧……………一五三

第十一章 松の嵐……………一七一

第十二章 邪神憑……………一八五

第三篇 阪丹珍聞

第十三章 煙の都……………二〇一

第十四章 夜の山路……………二一七

第十五章 盲目鳥……………二三一

第十六章 四郎狸……………二三九

第十七章 狐の尾……………二五五

第十八章 奥野操……………二六六

第十九章 逆襲……………二八三

第二〇章 仁志東……………二九七

第四篇 山青水清

第二十一章 参綾……………三一一

第二十二章 大僧坊……………三三一

第二十三章 海老坂……………三四四

第二十四章 神助……………三六二

第二十五章 妖魅來……………三七四

附録 靈の礎(九)

舍身活躍(子の巻)目次終



# 舍身活躍【子の巻】 [37]

口述者 出 口 瑞 月

筆録者 松 村 眞 澄  
北 村 隆 光

## 總 說

豫言者郷里に容れられずとは古來の諺である。瑞月が突然神界より神務に使役さるゝやうに成つてから、親族知己朋友その他の人々より、あらゆる悪罵嘲笑や防害等を受け乍ら、神命を遵守して今日まで隠忍して來た種々雑多の経緯を述べれば、到底一萬

や二萬枚の原稿で書きつくせるものではない。故に瑞月は靈界物語「含身活躍」の口述の初に當り、最初の靈的修行の一端を述べて本問題の神代の物語に移ろうと思ふ。幸ひ時機の到來せしものか、今日となつては自分の郷里の人々は神道家、佛敎家を始め、無宗敎者と雖も一人も反對を唱へたり惡罵嘲笑する者が無くなつて來た。否何人も郷里の人は瑞月の精神を了解し、却て讚辭を送るやうになつたのは全く時の力である。然るに釋迦にも提婆とか謂つて、何時の世にも反對者の絶わぬものである。大正の初頭より勃興し初めた吾が大本の敎に對し、學者、宗敎家、新聞記者などが、數年前より隨分攻撃の矢を放つて吾人の主張を根底より破砕せんせしは、新宗敎の初期に於ては免るべからざる順路である。茲に曰ふ「巨大なる器には巨大なる影がさす」と。また曰く「敵無きものは味方も無し」と。今日の社會よりの攻撃は實に止むを得ざる

ものである。否これが宗敎發展上の徑路かも知れない。吾人は今後に於ても、益々大本に對して大々的迫害の手が加はること、確信して居る。天の瓊茅の様に、大本はイラエバイラウほご太くふくれて固くなり、且つ氣分の好くなるものである。善惡吉凶禍福は同根である。筆先にも「惡く言はれて良くなる仕組じやぞよ」と、實に至言である。この頃綾部に丹波新聞といふ小さい新聞が出來て、靈界物語を評して曰く「一丁程先から見わるやうな原稿を書いて居る」と。實に良く靈界物語の真相を究めたものである。抑もこの物語は人間の頭腦の産物でない以上は、何處かに變つた所が無くてはならぬ筈だ。一丁程先から見わるやうな大きい字の原稿を二萬數千枚書いたと言つて居るのは、神の靈光が原稿の上に輝いて遠方から拜めたのであらう。又大きい文字に見わたのは所謂著者の人物が大きいから大きく見わたのだらう。否々ソウ慢心し

ては成らぬ。神様の偉大なる神格が現はれて、筆記者の寫した細い文字が丹波新聞記者の眼にソウ大きく見わたのであらうと、神直日大直日に見直し聞き直し、善意に解釋して置く方が結局大本の教理に叶ふであらう。實に天下一品の讀辭を興へて呉れた大名文章だぞ感謝しておく次第である。呵々。

大正十一年十月十二日

口 述 識

第一篇 安 閑 喜 樂 (一七八)

第一卷 富士山 (1013)

第一章 富士山 (1013)

◎萬葉集三の卷山部赤人望三不盡山一歌に

天地の分れし時ゆ神佐備て、高く貴き、駿河なる布士の高嶺を、天原、振放見れば  
度る日の、陰も隠ろひ、照月の、光も見えず、白雲も伊去はゞかり、時自久ぞ、雪  
は落ける、語つぎ、言繼ゆかむ、不盡の高嶺は。

◎反歌

田兒の浦ゆ、打出で見れば眞白にぞ、

不盡の高嶺に雪は零ける。

◎萬葉集、降辨の歌に

富士山

めに懸けて、いくかに成ぬ東道や、

三國をさかふ、ふじの芝山。

◎夫木集、光俊朝臣の歌に

こころ高き、かふひするがの中に出で。

四方に見わたる山は布士の根。

◎よみ人知らず

布士の山ひとつある物と思ひしに

かひにも有りてふ、駿河にもありてふ

◎

天雲も伊去はどかり飛ぶ鳥も翔も上らず 燎火を雪もて滅、落雪を火もと消つ

言ひも得ず、名も知らに靈くも座神かも。

◎源光行の歌に

富士の嶺の風にたゞよふ白雲を

天つ少女の袖かぞを見る

◎萬葉十四の駿河歌に

佐奴良久波多麻乃緒婆可里、古布良久波

布自能多可禰乃、奈流佐波能其登

◎

麻可奈思美、奴良久波思家良久、奈良久波、

伊豆能多可禰能、奈流左波奈須與

◎續古今集、後鳥羽院の歌

けぶり立、思ひも下や氷るらむ、

ふじの鳴澤、音むせぶ也

◎新拾遺集、慈圓の歌、

さみだる、ふじのなる澤、水越て、

音や煙に立まがふらむ

◎同權中納言公雅の歌

飛螢思ひはふじと鳴澤に、

うつる影こそ、もねばもゆらむ

◎伊勢家集に

人しれず思ひするがの富士のねは

我がごとやくかく絶わぬ燃ゆらむ

◎

はては身の富士の山ども成りぬるか

燃ゆるなけきの煙たねねば

◎古今集に

人知れず思ひを常にするがなる

富士の山こそわがみなりけれ

◎同集に

君と云へばみまれ見ずまれ富士のねの

めづらしけなく燃ゆるわが戀

◎同集に

富士のねのならぬ思ひにもればもね  
神だにけたぬむなし煙を

◎能言集に

草深みまだきつけたる蚊遣火と  
見ゆるは不盡の煙なりけり

◎重之の集に

焼く人も有らじと思ふ富士の山  
雪の中より煙こそたて

◎拾遺集に

千早ぶる神も思ひの有ればこそ

年経てふじの山も燃ゆらめ

◎大和物語に

ふじのねの絶わぬ思ひも有る物を

くゆるはつらき心なりけり

◎

誰が於に靡き果て、か富士の根の  
煙の末の見わす成るらむ

◎

朽果てし名柄の橋を造らばや

富士の煙の立たずなりなば

◎十六夜日記に

立別れ富士の煙を見ても尙

心ほそさのいかにそひけむ

◎其返し

かりそめに立ち別れても子を思ふ

おもひを富士の煙とぞ見し

◎

問きつる富士の煙は空に消れて

雲になごりの面蔭ぞ立つ

◎西行の歌

風に疎く富士の煙の空に消れて

行く方も知らぬ我が心かな

◎源頼朝郷の歌

道すがら富士の煙もわかざりき

晴るゝまもなき空のけしきた

◎

鹿知らぬ富士の煙も秋の夜の

月の爲にや立たずなりけむ



◎

北きたになし南みなみになして今日けふいくか

富士ふじの麓ふもとを巡めぐりきぬらむ

◎

みせばやな語かたらば更さらに言ことのはも

及およばぬふじの高たかね成なりけり

◎

富士ふじのねの烟けむりの末すえは絶たげにしを

ふりける雪ゆきや消きえせざるらむ

◎

きさらぎや今宵こん宵の月つきの影かげながら

富士ふじも霞かすみに雲くも隠かくれして

◎尋常じんじょう小學こがく國語こくご讀本どくほんにも

ふじの山やま

あたまを雲くもの上うへに出だし

四方しほうの山やまを見みおろして

かみなりさまを下したにきく

ふじは日本にっぽん一の山やま

背空せからたか高くそびわたち

からだに雪ゆきの着物きもの着きて

かすみのすそを遠くひく

ふじは日本一の山

以上の如く我富士山は古來各種の歌人に依つて其崇高雄大にして、日本國土に冠絶し、日本一の名高山と稱され、天神地祇八百萬の神の集り玉ふ聖場となり、特に木花咲耶姫命の御神靈と崇敬されて居る。三國一の富士の山と稱へ、日本、唐土、天竺の三ヶ國に於ける第一位の名山となつて居た。併し乍ら其富士山と云ふは、十數万年以前の富士山とは其高さに於て、又廣さに於ても、非常な相違がある。現在の富士山は皇典に所謂高千穂の峰が僅に残つてゐるのである。昔天教山と云ひ、又天橋山と云つた頃は、西は現代の滋賀縣、福井縣に長く其裾を垂れ、北は富山縣、新潟縣、東は朽木茨城、千葉、南は神奈川、靜岡、愛知、三重の諸縣よりズツと南方百四五十里も裾野

が曳いて居た。大地震の爲に南方は陥落し、今や太平洋の一部となつて居る。

此地點を高天原と稱され、其土地に住める神人を、高天原人種又は天孫民族と稱へられた。現在の富士山は古來の富士地帯の八合目以上が残つて居るのである。周圍殆ど一千三百里の富士地帯は青木ヶ原と總稱し、世界最大の高地であつて、五風十雨の順序よく、五穀豊穰し、果實稔り、眞に世界の樂土と稱へられて居た。其爲め、生存競争の弊害もなく、神の選民として天與の恩恵を樂みつゝあつたのである。

近江の琵琶湖は富士地帯の陥落せし時、其龜裂より生じたものである。そして古代の富士山地帯は殆ど三合目あたりに現代の富士の頂上の如き高さを保ち雲が取巻いて居た。故に天孫民族は四合目以上の地帯に安住して居た。外の國々より見れば、殆ど雲を隔て、其上に住居して居たのである。皇孫瓊々杵命が天の入重雲を伊都の千別

に千別て葦原の中津國に天降り玉ひきといふ古言は、即ち此世界最高の富士地帯より低地の國々へ降つて來られた事を云ふのである。決して太陽の世界とか、金星の世界から御降りになつたのではない事は勿論である。

顯國の御玉延長して金銀銅の救の橋の架けられし時も、最高の金橋は富士山上に高さを等しうしてゐた。又ヒマラヤ山は今日では世界最高の山と謂はれてゐるが、其時代は地教山と言ひ又銀橋山とも云つて、古代の富士の高さに比ぶれば、三分の一にも及ばなかつたのである。現代の富士山は一萬三千尺なれ共、古代の富士は六万尺も高さがあつたのである。佛者の所謂須彌仙山も此天教山を指したものである。

現代の清水灣及遠洲灘の一部の如きは、富士山の八合目に廣く展開せる大湖水であつて、筑紫の湖と稱へられてゐた。又同じ富士山地帯の信州諏訪の湖は須佐の湖と

云つたのである。筑紫の湖には金龍數多棲息して、大神に仕へ、風雨雷電を守護してゐた。又玉の湖には白龍數多棲息して、葦原の瑞穂國（全世界）の氣候を順調ならしむべく守護してゐたのである。そして素戔嗚尊の神靈がこれを保護し玉ひ、富士地帯の二合目あたりに位地を占めてゐた。太古の大地震に依つて、此地帯は中心點程多く陥没し、周圍は比較的陥没の度が少かつた。其爲現代の如く、高千穂の峰たる現富士を除く外、海拔の程度が殆ど平均を保つ事になつたのである。現代の山城、丹波などは、さちらかと云へば地球の傾斜の影響に依つて少しく上つた位である。

丹波は元田場と書き、天照大御神が青人草の食いて活くべき稻種を作り玉うた所である。故に五穀を守るに云ふ豊受姫神は、丹波國丹波郡丹波村比沼の眞名井に鎮座ましまし、雄略天皇の御代に至りて、伊勢國山田に御遷宮になつたのである。御即

位式の時、由紀田、主基田をお選みになるのも、現今の琵琶湖以西が五穀を作られた神代の因縁に基くからである。由紀といふ言靈は安國の靈反しであり、主基といふ言靈は知ろし召す國の靈反しである。之を見ても丹波の國には神代より深き因縁のある事が分るのである。

又小亞細亞のアーメニヤ及びコーカス山、エルサレム、メソポタミヤ及びベルシヤ印度の一部は、富士地帯の如く高く雲上に突出してゐた。印度の如きも天竺と稱へられて、其地方での最高地點であつたが、富士山の陥没と同時に、此地も亦今の如く陥落したのである。アーメニヤといふ事は天の意味又は高天原の意味である。エルサレムといふ神代の意義はウズの都、天國樂土の意味がある。茲に國祖國治立尊は始めて出現され、大入洲彥命の敵軍に圍まれ玉ひし時、國治立尊が蓮華臺上より神力

を發揮して、惡魔の據れる天保山を陥落せしむると同時に天教山を現出せしめ玉うたことは、靈界物語第一卷に述ぶる通りである。又エルサレムは現今のエルサレムではない。アーメニヤの南方に當るエルセルムであつた。そしてヨルダン河も現今のヨルダン河とは違つてゐることは勿論である。死海の位置もメソポタミヤの東西を狭んで流れ落つる現今の波斯灣がそれであつた。

又現今の地中海は此物語に於て、古代の名を用ゐ、瀬戸の海と稱へられてゐる。此瀬戸の海はアーメニヤの附近迄展開してゐた。併し乍らこれも震災の爲に瀬戸の海の東部は陸地となつて了つたのである。故に此物語は地球最初の地理に依つて口述するものであるから、今日の地理學の上から見れば、非常に位置又は名義が變つてゐることを豫め承知して讀んで貰ひたいのである。

「舍身活躍」の最初に當りて、此富士山（太古の天教山）を述べたのは瑞月が入道の最初、富士の天使松岡神に靈魂を導かれ、此太古の状況を見せて貰ひ、其肉體は高熊山の岩窟に守られて居つた因縁に依つて、物語の始めに、富士山の太略を口述するのが順序だと思ふからである。

「舍身活躍」は瑞月が明治卅一年の五月、再び高熊山に神勅を奉じて二週間の修業を試み、靈眼に映じさせて頂きし事や、過、現、未の現幽神の三界を探險して、神々の御活動を目撃したる太略を口述する考へである。

あ、惟神靈幸倍坐世。

（大正二一、一〇、八、書八、一八、松村真澄録）

## 第二章

### 葱

#### 節 (1014)

西は半國東は愛宕

南妙見北帝釋の

山の屏風を引きまわし

中の穴太で牛を飼ふ

青垣山を四方に回らした山陰道の喉首口、丹波の龜岡に程近き、曾我部村の大字穴太は瑞月が生地である。賤ヶ伏屋に産聲を上げてより殆ど廿七年夢の如くに過ぎ去り廿八歳を迎へた明治卅一年の如月の八日、半圓の月は皎々として天空に輝き渡り、地上には馥郁たる梅花の薫り、冷き風に送られて床しく、人の心も華やかに何となく春を迎へた氣分に漂ふ。

瑞月は其頃事業の閑暇に淨瑠璃を唸る事を以て唯一の樂みとして居た。浪華の地よ

り下つて来た吾妻太夫といふ盲目の男の師匠に、終日の業を済ませ、三味は無げれども叩きにて節を仕込まれて居た。

今宵は淨瑠璃の稽古友達の七八人、温習會を催すべく、大石某と云ふ知己の家で女義太夫を雇ひ來り、ペラ／＼三味線をひかせ乍ら、葱節を得意氣になつて唸鳴つて居た。下手の横好きとか云つて、最初の露拂を勤めたのは瑞月で、鏡山又助節の段を汗みぢろになつて語り終り、其外二三人の天狗連の、竹筒を吹いた様な奴拍子のぬけた聲の淨瑠璃が止むと、再び三月の菱餅を二つに切つた様な硬々した角立つたものを着せられ、破れ扇をたいて唸つて居る。其時は太閤記の十段目光秀が「夕顔棚の此方より現はれ出でたる……」と云ふ正念場であつた。老若男女は小さき百姓家に縁の隅から庭は云ふに及ばず、遅れて來たものは門に立つて聞くに云ふ大盛況である。

其時宮相撲をとつて居た若錦と云ふ男を先登に、俠客の小牛、留公、與三公、茂一の五人連れ、矢庭に演壇に上り、有無を云はせず瑞月を擁いで附近の桑畑の中へ連れ行き、打つ、蹴る、毟るの大亂氣騒ぎを始めた。

淨瑠璃友達で隣家の嘘勝と云ふデモ俠客が二三人の手下を引き連れ、二尺許りの割木を各自に持つて五人の仲に飛び込み格闘を始めた。喧嘩は何時の間にか一方へ轉宅して了ひ、バラ／＼と喚きつ、東南の方へ逃げて行く。嘘勝の一隊は後を追つかける。

其後へ二三の友人がやつて來て、瑞月を助けて牧畜場の精乳館と云ふ自分の館へ連れて歸つて呉れた。ひどく頭部を五つ六つ割木で殴られた結果、何となく頭に重たくなり、うづき出し、耳はジャン／＼と早鐘をつく様に聞けて來た。時々火事の警

鐘ではないかと、負傷した身体を擡げて戸を開き外を眺めた事もあつた。

精乳館は牛乳を搾り附近の村落に販賣するのが營業であつた。牛乳配達人は未明からやつて来て搾乳の量り渡しを待つて居る。瑞月は頭痛目眩めき、搾乳どころの騒ぎではない。二十數頭の牧牛は空腹を訴へたり、乳の張り切る爲め悲し相な聲を出して一齊に呻り出した。其聲が頭に響くと一層頭が割れる様な氣分がする。それでも神様を祈らうとも思はねば、醫者を呼び、藥を付け様とも飲まうとも思はない。只自分の心裡に往復して居るのは、今迄大切に思ふて居た營業はスツカリ忘れて了ひ、若御一派の奴に對し、早く本復して仕返しの大喧嘩をやつてやらねばならぬと、そればかりを一縷の望みの綱として居た。門口の戸も裏口の戸も錠が卸してある。それ故配達人は這入る事も出来ぬ、己むを得ず宮垣内の母の宅へ走り

「何故か門口が締つて居る、一寸来て下さい」

と云つて母を呼びに行つた。相手方の村上某が躑てやつて来る時分だから自分の昨夜の喧嘩で負傷した事を見られては餘り面白くないと、借借みを出して、頭を手拭で縛り目をふさいだ儘、慣れた道とて、自分の嘗て借つて置いた喜樂亭と云ふ郷神社の前の矮屋に隠れ頭から夜具を被つて息をこらして横つて居た。

暫らくすると、門口から自分の名を呼び乍ら、慌しく母が這入つて來られた。瑞月は

「こりや大變だ、昨夜の喧嘩が分つたのだらう、額口の傷を見られない様に……」  
と夜具をグツスリ被り、足の膝から先は出る程縮んで、寝たふりをして居た。遠慮會釋もなく母は夜具をまくり上げ

「お前は又喧嘩をしたのだなア、去年までは親爺さんが居られたので誰も指一本さ  
ねる者も無かつたが、俺が後家になつたと思ふて侮つて、家の俵を斯んな酷い目に  
會はしたのであらう。去年の冬から丁度之で九回目、中途に夫に別れる程不幸の者  
はない、又親のない子程可愛なものはない。弟の由松は、兄の讐討だとか云つ  
て若錦の處へ押掛け、反對に頭をこつかれて、血を出して歸つて来て家に唸つて居  
る。兄は又此の通り、神も佛も此の世にはないものか」

と自分の子が悪いとは思はず、加害者を怨んで居られる。之を聞くに自分も氣の毒で  
堪らなくなり、傷の痛みは何處へやら逃げ去つて了つた。

實際の事を云へば自分は、今迄父がブラ／＼病で二三年間苦しんで居たので、それ  
が氣に掛り、云ひ度い事も云はず、父に心配をさせまいと思ふて、人と喧嘩する様な

事は成るべく避ける様にして居たから、村の人々にも若い連中にも、チツとも憎まれ  
た事は無く、却て喜樂さん／＼と云つて重責がられ、可愛がられて居たのである。そ  
うした處、明治三十年の夏、父は藥石効なく遂に歸幽したので、最早病身の父に心配  
さす事もなくなつた。破れ侠客が田舎で威張り散らし、良民を苦しめるのを見る度に  
聞く度に、癪に觸つて堪らない。頼まれもせぬのに、喧嘩の中へ飛び込んで仲裁をし  
たり、終には調子に乗つて、無賴漢を向ふへまわし喧嘩をするのを、一廉の手柄の様  
に思ふ様になつた。二三遍うまく喧嘩の仲裁をして味を占め、

「喧嘩の仲裁には喜樂さんに限る」

と村の者におだてられ、益々得意となつて

「誰か面白い喧嘩をして呉れないか、又一つ仲裁して名を賣つてやらう」



と下らぬ野心にかられて、チツと高い聲で話して居る門を通つても、聞き耳立てる様になつて居たのである。

其時、龜岡の餘部と云ふ處に干支吉と云ふ俠客があり、其兄弟分として威張つて居た宿屋の息子の勘吉と云ふ男、身体も大きく背も高く、力も強く、宮相撲をとつて遠近に鳴らして居た。そして其父親は三哲と云つて、附近で名の賣れた俠客であつた。其息子の勘吉が又もや非常に賣り出し、村の者は大變に困つて居た。第一賭場を開いて毎日毎夜テラを取り、乾兒の四五人も養ふて居つた。自分の弟も勘吉の賭場へ毎日毎夜出入し、自分の時計を賣り衣類を賣り、終ひには夜の間に數百圓を投じた乳牛をひき出し、龜岡あたりで五六十圓に投げ賣りして、それを賭博の資とする。自分が意見をすると、勘吉親分を傘にきて挺にも棒にもおへない。村中の息子は鼠が餅をひ

く様に、今日も一人、明日も二人と云ふ調子で勘吉の賭場に引込まれ、親達は非常に嘆いて居る。けれども勘吉の耳に這入つては如何な事をしられるか知れんと思ひ、各自に小聲で呟いて居るのみであつた。

之を聞いた自分は腹が立つて堪らず、火事場に使ふ鳶口を擔たけて、河内屋の勘吉が賭場へ只一人、夜の八時頃飛び込み、車坐になつて丁半を圓はして居た弟の帯に鳶口を引つかけ、二三間引摺り出した。そうすると親分の勘吉が巻舌になつて

「男を賣つた勘吉の賭場へ賭場荒しに来よつたのか、素人の貴様にこんな事しられて黙つて居つては男が立たぬ。……オイ與三公、留公、喜樂をのばして了へ」  
と號令をかけて居る。自分は逃ぐるが奥の手と、尻を後へつき出し二つ三つボンク、とた、いたきり、一目散に牧場に逃げて歸つて來た。そして門の門を堅く締めて、

若しも戸を打破つて這入るが最後、打ちのばしてやらうと、椽の棒を持つて外の足音を考へて居た。

其夜は何の事も無かつた。勘吉も口程にない奴だと安心して牧場にて眠つて居ると、夜の十時頃、二二三の乾兒を連れて門口へやつて來た。そして

「オイ喜樂、一寸用があるから外へ出て呉れ」

と囁つて居る。流石に先方も、迂闊に這入つて産口でやられては堪らんと思ふたか門口に立つて誘ひ出してゐる。自分は故意に作り脚をして寝たふりをして居た。そして程の棒を寢床の横に置いてあつた。暫らくすると女の聲で

「あんたはん、立派な俠客さんちやおまへんか、たつた一人の、あんな弱々しい喜樂さんに喧嘩に來るなんて、男が下りまつせ、サアあんたはん、一杯桑酒屋へ飲み

に行きまほ」

と勘吉の頬邊をビシヤ／＼たゝいて居る音が聞けて來た。此女は中村の多田龜と云ふ老俠客の娘で、多田琴と云ふ女である。或機會から妙な仲となつて居つた。其琴が中村から遙々やつて來て、門口で河内屋に出會ふたのである。流石の俠客も、横面をやさしい聲で殿られてグニヤ／＼になり、五六丁下の吉川村の桑酒屋へ酒を飲みに行つて了つた。

それから自分は多田琴の父親の多田龜に就いて俠客學問を研究し始めた。多田龜の云ふのには

「俠客になつて名を擧げ様と思へば、頭を割られたり、腕の一本位とられなくては本物にならぬ。此方が生命を捨てる氣になれば、何百人の敵も逃げるものだ。兎に

角氣轉が第一だ」

「自分の娘の情夫と知り乍ら、碌でもない事を一生懸命に教へて呉れた。さうして多田龜の云ふのには

「俺の乾兒も大分澤山あるのだが、跡を繼がす者が無い。これからお前に仕込んでやるから、此乾兒を捨てるのは惜いから、若親分になつたら如何だ。お米さん（瑞月の母）に相談して、お前さんを此方の養子に貰ふ積だ。此方も一人の娘をお前さんの自由にさして、黙つて居るのについては考へがあるのだ。よもや一時のテンプに俺の一人娘をなぶり者にしたのじやあるまいな？」

と退引させぬ釘をさされた。父の居る中から、上田の跡は弟に繼がして貰ひ度いと云つて頼んで居つた。兩親

は龜岡の或易者に卦を立て、貰ひ

「此子は總領に生れて居るけれど、親の屋敷に居つては若死をするから養子にやつたが良し」

といつたとかで、兩親は已に自分の養子に行くのを承認して了つた。然し俠客の養子に遣らうとは思つて居なかつたのである。

自分は幼時から貧家に生れ、弱者に對する強者の横暴を非常に不快に感じて居た。人間は少しく頭をあけて金でも貯めれば、如何な馬鹿でも賢う見られ、敬はれるが、少しく地平線下に落ちると、子供迄が寄つて集つて踏みつけ様とする。事大思想の盛んな田舎では尙更はけしいのである。何でも一つ衆に擡んでなければ頭があがらない生存の價値が無いと、幼時から思ひつめて居た。學問が無ければ官吏になる事も出来

ず、軍人に成り度うても成れず、弱い者を助け、強い者を叩ます侠客になつた方が、一番名が擧がるだらうと下らぬ事を考へ、幡隨院長兵衛のちよんがれを聞いて、明治の幡隨院長兵衛は俺がなつてやらうかと意思ふ事が屢々あつた。其平素の思ひと強者に虐げられた無念さが一つになつて、社會の弱者に對する同情心が、父の歸幽に共に突發し、生命懸けの俠客回ませを企て、猪口才な奴と彼等が社會から睨まれて居たから一年経ぬ中に九回迄も酷い目に會はされたのである。若しも神様の御用をせなかつたらば、自分は三十四五迄に叩き殺されて居るかも知れないと思ひ浮べて、神様の御恩がシミ／＼と有難くなつて來たのである。

自分は母の言葉の如く、決して父が逝くなつた爲めに俠客に苦しめられたのではない、つまり自分から招いた災である事を其時已に自覺し得たのである。

(大正二、一〇、八、喜八、一八、北村隆光録)

瑞 月

一度二度墜落見越し飛行便

脱線汽車の代用として

王道は正道を行き政黨は

横道霸道を進み行くかな

## 第三章 破軍星 (一〇一五)

大阪から田舎下しの舞の師匠に、お玉といふ四十位の年増があつた。村の若者は端唄や舞や踊、毎晩稽古に往つて居つた。何時の間にかは此お玉は俠客の勘吉の内縁の妻となつてゐた。そして勘吉は其お玉に村の若い者をくつつけ、そこへ押へては物言ひを付け、金銭を絞り取つて居たのである。此女は少し淨瑠璃も知つてゐて、若者に「チヨコノ」札で教へて居た。

次郎松といふ男、五十の坂を越えて居乍ら鰯の淋しさに、若い者の舞や踊や淨瑠璃の稽古を毎夜欠かさず見聞に行き、遂にはお玉と勘吉の美人局に陥り、寝込みを押へられ、頭や脊中をした、か毟られ、眞青になつて我家に逃げ歸り、ブル／＼慄へて

居た。そこへ上田長吉といふ、次郎松の近所の二十五歳の男がやつて来て、いふやうに「わしが勘吉とお玉の中へ這入つて話をうまくつけて来たから、二百圓出さない。そしたら、勘吉も怒りはすまい」

と言つた。次郎松は生れついでに吝嗇坊、借相に工面して、清水の舞臺から飛んだやうな心持で、五十圓の金を拵へ、長吉の手に渡した。長吉はお玉に向つて、

「次郎松さんが二十五圓出して呉れたから、これで勘辨しなさい。此廿五圓はわしの金ぢやが、お前に上げる」

と甘くチヨロまかして、又お玉に妙な關係をつけて了つた。

肝腎の勘吉はそんなことは知らず、五六人の乾兒を伴れ、暗夜に次郎松の家に押掛け行き、強談判を始め出した。平素から憂ひ喜びの悪口言ひと、村中から憎まれて

ゐた次郎松が、今夜は河内屋にやられるのだ、よい間だ、面白い、見て來うか……と次から次へ言ひ會はし、門には一杯の人だかりになつてゐる。次郎松の老母は裏口から飛び出し、我家に來り、

「コレ、喜樂さん、大變なことが起つて來た。お前も親類のことであり、内の松が今二百兩の金を出さねば、地獄川へ俵につめて放り込まれるとだから、早う來て勘吉に談判しておくれ……」

と慄ひく泣いてゐる。自分は「ヨシ來た!」……と言つたもの、近所にワア／＼と大勢の聲が聞けてゐる、勘吉の嗚り聲も手に取る如く耳にひびく。幾分か、コリヤ險呑だ、ウツカリ行く譯には行こまい……と、稍卑怯心の虫が腹の底の方で嘔き出した。そして八十四歳になつた老祖母や母が、不安な顔色をして自分の返事を如何い

ふかど待つてゐるやうである。

「おこの婆アさんは我子の一大事だ、一生懸命に」

「喜樂さん、早う來ておくれ、松がやられて了ふ……」

と泣き立てる。

「そんなら行きませう」

と自分は立上らうとする。老祖母は行くなと目で知らず、おこの婆アさんは

「コレ喜樂さん、親類で居つて、こんな時に助けに來てくれんのなら、お前の所へ二十圓貸した金を今返しておくれ。河内屋にやる足しにせんならんから、そしてこんな時に來てくれな、モウこれから何を頼まれても聞きませんぞね」

と少しの借金を恩にきせて無理に引出さうとする。自分は一寸むかついたが、……併

し世間の者は、そんな事情で怒つて行かなんたとは思はずに、勘吉に辭易して、さうく喜樂も能う來なんだと誹るであらう。折角侠客の玉子になりかけた所を、なきがらだと言はれては、今までの事が水泡に歸する、ナアニ多田龜の救へた通り、命を的にかけて行きさ人すれば大丈夫だ、一つ度胸を放り出してやろう、名を賣るのは今ぢや……と俄に強くなつて、老母や母の不安な顔色を見ぬ振りして、我家を飛び出し、裏の藪の垣を蜘蛛の鼻に引つか、り乍ら、二つもくぐりぬけて、春戸口から次郎松の奥の間へ入りこみ、何くはん顔して、奥からヌツと火鉢の側へ現はれて、井筒型の模様のあるダテラをラウリと羽織り、鷹場に座り込んだ。そして破軍星の劍先を敵に向けてやらう、自分は劍先の柄に座を占められたれば、キツと勝つに違ひないと、稍迷信に囚はれ乍ら、

「オイ河内屋、こんなヒヨロ／＼爺に、屈強盛りの侠客が五人も六人も乾兒を伴れて、押よせて來るとは何の事だ。侠客の俠の字は何といふ事が知つてゐるか。遊廓へでも行つて男を賣るのが侠客の本分ぢやないか。こんな小つほげな田舎で、へボ爺を苦めた所でお前の名はあがる所か、却てダダ下がりだぞ」

と頭から咬みつけて見た。河内屋は何と思ふたか、物も言はず門口へ出て、乾兒の五人を中へ入れ、

「オイ喜樂を叩きのばせ！次郎松を引ずり出せ！」

と號令をかけてゐる。おこの婆アさんは自分の宅へ來たなり、怖がつて震うて歸つて來ない。次郎松は長火鉢の前に坐つたま、眞青な顔して

「破軍星はさつちやを向いてゐる、なア喜樂さん……」

なご調子外れな聲で尋ねてゐる。子分の中の兩腕と聞けたる、留公、與三公は親分にケシを掛けられ、震ひく、

「コレ喜樂さん、一寸出て下され。次郎松さん、親分があない言うてますから出て下さい」

なご怖々ニユツと手をつき出して、半分ふるうてゐる。河内屋は犬の遠吠に似ず、門口から號令をきびしくかける計りである。自分は懐手をした儀、ドストすわり揚げ面をしてワザと豪傑らしく空威張りをしてゐた。併し乍ら脇の下や腰のあたりは秋の夜寒にも似ず、汗がビツシヨリと着物をぬらしてゐた。門口には村の若い者や女が先ぐりくやつて来て、ワイ／＼とぞめいてゐる。不斷から憎まれてゐるので、誰一人仲裁に入らうとする者がない。

暫くすると嘘勝と言ふ男が弟の長吉を引張つて来た。此男は次郎松から常に世話になつて居る所から、近所の事でもあり、且つ自分の弟に關した事でもあるので、裏口から長吉を伴つて這入つて来たのである。自分は長吉に向ひ、ワザと大きな聲で「此間松さんからお玉さんに渡してくれといつて、こまづけた五十圓の金は如何したのか？」

と噁なりつけて見た。長吉は震ひ乍ら、

「其五十圓は確にお玉さんに渡しました」

と云ふ。そこで喜樂は皆に聞ゆる様に

「お玉といふ女は聞けば、河内屋の園女ぢやないか。俠客の内縁にもせよ、女房になる女が、男から金の五十圓も取るゝは怪しからん奴だ。これは要するに河内屋が



差圖ではあるまい。こんな女を持つて居ると、俠客の名が汚れるのみならず、此村の耻だ。男達を以て任ずる當時賣出しの河内屋が、女を玉に使うて金を取るといふ卑怯などは決してする筈がない。大方貴様がチヨロまかしたのだから」

と嘸鳴つて見せた。贖勝は妙な顔をして、

「ごも角、弟の長吉が悪いのだから、此事は私に任して貰いたい。河内屋だつて男の顔に泥をぬられて黙つておろまい。俠客といふ者は、女を玉に使うて金を取るといふやうなとはしそうな筈がない。こんな事がカンテラの親分にでも聞いたら、それこそ大變だぞ」

と嘸鳴りかけた。河内屋はお玉を次郎松が犯し、俠客の顔に泥を塗つたから、承知しない、二百圓の金を出さねば地獄川へ放り込むとねだつて居たのが、少し恥しくなつ

たど見ね、門口から再び上り口の火鉢の前迄やつて来て

勘吉「此勘吉は、女を玉に金をねだつたなどと言はれちや、男が立ちません。何かの間違だらう……コラ與三公、留公、貴様、そんな馬鹿な事を次郎松さんに言つたのか不都合な奴だ」

と嘸鳴りつけた。與三公と留公は……親分が命令ぢやないか……と言ひだされ、言う譯にもいかんといふやうな顔付で、頭をガシ／＼かき乍ら

「へー、別にそんなことア、言つた覚えはムいまへん」

と巻舌が何時の間にか、田舎の詞の生地に戻つて了つてゐる。河内屋は顔色を和らけ「ヤア喜樂さん、心配かけて済みません。災は下からと言ひまして、子供の奴がこちらの知らんことを吐すもんだから、こんな騒動になつたのです。併し私も御存じ

の通り、今賣出しの俠客だ。素人の喜樂さんにコミ割られたと人に言はれては、男の顔が立ちません。これは一つ仲直りをして、綺麗サツパリと垢をつけませう』と碎けてかゝる。喜樂は

「そう事が分れば結構だ。そんなら次郎松さんから十五圓出すから、君の方から十五圓出して、それで一つ宴會でも開いて仲直りをせうぢやないか」

と問うて見た。河内屋はヤレ肩の荷が下りたというやうな體裁で、抜いた刀の納めをここに困つて居たのを、ヤツと幸ひ二つ返事で、

「何分喜樂さんに任ませう。そんなら明晩、龜岡の吳服町の正月屋で仲直りをするにせう。午後六時から……」

と言つた。次郎松はヤツと安心したもの、如く、二百圓が十五圓になつたので、これ

も異議なく出金することを承諾した。そしてウッ勝は、河内屋が一所に明晩宴會に行かうかと勧めるのを、俄に明日は大阪の親類へ急用が出来たから……と云つて体よく断つて了つた。

これで其晩の悶錯は一寸ケリがつき、翌日、瑞月と次郎松と長吉との三人は龜岡吳服町の正月屋といふ二階造りの小さい料理屋へ行くこととなつた。

(大正一一、一〇、八、舊八、一八、松村眞澄録)

第四章 素破抜 (二〇一六)

「廣い龜岡の十三町に 後を見返す女郎はない」

俗謡に唄はれて居る龜岡の町には、藝者仲居に至る迄、皆京都の田舎下し、バチ者の仕入れ者ばかりで、三味線を引くに云つたら、たすきの紐でもく、りつけて、座敷中引まわす位が關の山の不見轉ばかりである。股で挟んで金をとる釘抜女がザツと三打計り あちらこちらの料亭にうろついて居つた。勘公のお宿坊にして居る吳服町の正月屋には、鄙には稀な濫皮の剝けた、一寸小意氣な、三味を能う引かねデモ藝者が二三人抱えてあつた。何れも春を賣るのが目的である。其中に年は二十位で、お愛といふ女が始終河内屋に馴染を重ねて、機嫌克く年期を務めたら、夫婦になろうと

まで、約束をして居たのである。

勘公は五人の乾兒を總揚げして、意氣揚々として、正月屋に乗込み、裏の六疊二間の古腐つた座敷に、眞黒けに垢で光つた柱を脊中に、自慢話に耽つてゐる。そこへお愛が茶を酌んで来て、

お愛 「哥兄さんイヤ親方さん、あの次郎松事件は如何になりました。きままだか喜樂とか云ふ奴、割とは度し太い奴だ」と此間も言はれましたが、何にか巧く片はつきましたかね」

勘吉 「サア俺の威勢に恐れて、流石の喜樂も、どうく泣きを入れよつて、今日はあまりに来るんだ。今晚の七時頃には喜樂、次郎松、長吉の三人がこゝへ謝罪に来る筈だ」

お愛「そりや心地よい事ですなア。一遍喜樂が親方にあやまる所を見せて欲しいもんですな」

勘吉「アハ、、、、俠客は俠客としてそれ相當の禮式があるのだ。女などの見に来る所ぢやない。さうぞ二階に席を拵へて、誰も來ない様にしておいてくれ。其式さへ濟めば手を叩いてやるから、其時にあがつて來て酌をするんだ」

お愛「一番に喜まますかさんか喜樂さんか、お酒を注ぐんですか」

「そんな事は云うたか云はんか、喜樂は丁度其時分に穴太を出立しかけてゐる位だから、何程エライ天耳通でも、聞取ることは出来なかつた。

午後七時頃、一寸腰の具合の悪いヨボ／＼した次郎松さんと、小男の長吉とを伴れて、正月屋の門口を潜つた。例のお愛は顔に冷笑を泛べて、此方が御免なさいと言へ

ば、厭相に「へー」と答へて脊中を向けた。喜樂は……此スベタ奴、大事のお客さんを捉へて馬鹿にしやがる、そんなことで商賣が繁昌するか……と云ひたくなつた。されど何とはなしに一方は無頼漢を相手のこと、て、稍不安の雲が心に往復してゐたのでワザと笑顔を作り、

喜樂「河内屋さんは來て居られますか？」

と問ひかけた。お愛は

お愛「へー親分ですか。晝頃から乾兒をつれて遊びに來てゐられます。お前さんは喜樂さんですか。どう／＼河内屋はんに負けなはつたのんですやろ」

と冷やかに笑ふ。其態度に又むかついた。

喜樂「オイ長吉、次郎松さん、こんな所に立つて居つても仕方がないぢやないか。女中

「さんに案内して貰つて奥へ通らうかい」

と箱甲張つた聲で喚鳴り立てた。庭の上に入疊ばかり二階座敷がある。そこの段階子をトン／＼と下りて来たのは與三公であつた。

與三「あ、喜樂さん、早く上つて下さい。親方が待つて居ます。約束の時間が遅れたと云うて、大變に御立腹ですよ。サア／＼早く」

と先に立つて段階子をあがる。三人も後に跟いて二階へ上つて見た。チャンと足のない膳に、五つ六つの菓子碗や皿が並べられ、盃洗までがランプの影を映して、三人のほつた襟に、ランプの月を盃洗の海がゆらつかしてゐる。

勘公「喜樂さん、遠方御苦勞でした。ズイ分お前さんも世話好ですなア。餘り人の事を構うもんぢやありませんぜ。今の人間は叶はん時は神佛のやうに言うて頼み、チン

コハイコするもんだが、やがて難が去ると、素知らぬ顔するもんだ。人の世話もよい加減になるが宜しかろ」

と何だか意味ありけな事を云ふ。

喜樂「河内屋さん、これも止むを得ずだ。乗りかけた舟で、後へ引返す譯にも行かず。親類のことでもあり、君の商買の邪魔としては濟まんのだけれど、今度の事件ばかりは例外だと思つて貰はねばならん」

勘公「それでせう、何分次郎松さんに金を借つたり、いろ／＼と世話になつてゐられる。そうだから、こちらも推量はしてゐるのだ。さう見ても河内屋は血もあれば涙もある男ですよ。チツとは可愛がつてやつて下せな」

と半分ばかり俠客言葉を使うてゐる。元が土百姓あがりの俠客だから、箱根越えずの

江戸つ兒を使はうとするので、其言靈にきこもなく拍子抜けがして、餘り怖相にもなく又權威もない。何だかダラけた様な心持がする。

勘公「次郎ヨモさんイヤ松さん、ズイ分お玉が可愛がつて頂いた相です。此後もお見捨てなく御世話をしてやつて下さい。私も男一匹だ。一日男に汚された女を再び連れようとは思ひませんから、アハ、ハ、」

ゴリザと豪傑笑ひをして肩をゆすつてゐる。

次郎松「イヤもう年を老つて、思はぬホテテノゴを致しまして、皆さんに御心配をかける年甲斐もないことで御座いますワイ。ハイ」

勘公「オイ長吉、貴様もお玉に少々おかけを蒙つたといふ事だが、有態に白状せい！返答によつては此方にも考へがあるぞ」

長吉に對してはガラリと態度をかへ、強壓的に嚇しつけた。

長吉「ハイ、あの次郎松さんが何で、ヘテそしてヤツパリ松さんがお玉はんの何です」  
とモヂくし乍ら、ソロク震ひ出した。

勘公「コラ長吉、貴様故にこんなザマの悪い事件が起つたのだ。此責任は残らず貴様にあるのだ。何だウソ勝の母丸を持つたと思つて、ウソ勝の親分はイロハ孝太郎だと云つて威張つてゐるやがるが、俺は、貴様も知つてゐる通り、島原のカンテラ親分の兄弟分だ。事と品によつたら、貴様の爲に親分同士の一悶錯が起らうも知れんぞ」

長吉「オ、オウ河内屋、そんなこと云うたて、シ、知らんワイ。そう喧し言はずに、今日は仲直りに来たんだから、ゆつくりと酒でも呑んで別れよぢやないか」

勘公「コリヤ懐客の儀式を知つてゐるか、俺の盃を頂かうと思つたら、それ丈の方法を

知らなくては今日の役は勤まらんぞ。モシ、仕損じをしよつたら、それこそ承知せんか、そつ思へ」

喜樂、次郎松に對する不平を、弱い男の長吉一人に集中してゐる其可笑しさ。

喜樂「君、僕は素人だ。君は押しも押されぬ立派な俠客さんだ。俠客同士ならば、

こんな六かしい儀式もあろうかも知れぬが、俺たちは素人だから、前以て斷つておく。俠客の作法に叶はないと云つて、因縁をつげるのなら、もつ盃は貰はんワ」

次郎松「私も喜樂さんの云ふ通り、六かしいことは知らんのだが、こちらの流儀にして

貰ひたい、なア河内屋さん」

勘公「あ、そついへばそうだ、そんなら隨意に、伸直りの酒を汲みかわすことにしませう。オイ與三、先づ第一に喜樂さんに注いで、それから俺に注ぐのだ、俺の盃を

松さんに注ぐのだ、それから後は勝手に注いで呑んだがよい」

與三「へー」

と云ひ乍ら、珊徳利の握れんやうなあついな奴から、朝顔の花の形したうす平たい盃にドブくくくと注ぐ。喜樂は一口にグイと呑んで、

喜樂「失敬！」

といひ乍ら勘公に渡した。勘公は卷舌まぜりのドス聲で、

勘公「ハイ宜しい」

と云ひ乍ら受取り、與三公に注がせた。與三公が注がうとするやつを無理に盃を上の方へ上げて一滴も入れさせず、呑んだふりをして……ヘン貴様の盃を表面は兎も角、實際誰が呑むもんか……といふやうな面付をしてゐる。河内屋は盃を次郎松の

前に猿臂を伸ばしてグツと差出し、

勘公「サア色男の松さん、ワツちの盃はお氣に入りますまいが、今日は仲直りの式だから、ドツサリと受けて下さい。イヤ十分打三けて酔うて貰はねば、仲直りの精神が貫徹しません」

と云ひ乍ら、與三の徳利をグイと引たくり、ドブくくくと松さんの持つてゐる盃へ注いだ。松さんは

次郎松「エ、モウ結構く、ちりますく、こほれます」

と言つてゐるのを構はず、燂徳利をグイと向うへつきつけ、膝の上に一杯の酒をタプくくとこぼして了つた。

次郎松「あ、勿体ない、此結構な酒を」

と云ひ乍ら、膝の上や疊の上にごほれた酒を平手にすましてはチウーくくと吸うてる。

勘公「コレ松さん、わつちの盃が氣に入らんのか、皆づちあけて了うとは、餘り馬鹿にした仕打ぢやないか」

と無理難題を吹つかけて、引つか、ろうとしてゐる。

喜樂「オイ君、そんな冗談を言ふもんだないよ。君の親切があふれて出たのだから、松さんも感謝してゐるんだろ。僕も感謝してゐる。何分燂酒だからな、アハ、ハ、」と笑ひに紛らす。主客双方九人は表面仲直りといひ乍ら、非常に深い溝渠を中において、危い丸木橋を渡るやうな心持で、仲直りの盃を汲みかわしてゐた。ソロ／＼勘公は當こすりだらけの都々逸を唄ひ出した。



其間に長吉は少しく酒がまわり、階段を無断で下つて了つた。

下座敷には勲公の思ひ者お愛を始め、二人の不見轉藝者が長火鉢を圍んで河内屋話に耽つてゐた。長吉はヒョロ／＼し乍ら三人の前にドツカと坐つた。

お愛「コレ長吉やん、どう／＼喜樂安閑坊も始めは偉い男だつたが、尻尾を出しよつたぢやおへんか。そんなことなら、体よく始めからあやまつておくとい、のに、何程力があるよ云つても、河内屋の日那にかけたら、到底駄目なことはきまつて居るのに、本當に喜樂といふ男は安閑坊だなア」

長吉「何、尾をまいたんでも何でも無い。此前にも河内屋と下河原で喧嘩をした時に、河内屋の方は子分や野次馬で三十人ばかりで、一人の喜樂を取まいたが、それでも喜樂は五六人なぐりたをして甘く逃げよつた位だから、今度だつて負たんぢやない。マ

ア／＼五分々々にしとかうかい」

お愛「何と卑怯な喜樂さんだなア。何十人相手にしても、叶はんやうになつたら逃げるのなら、あたいたつて、そんな易い喧嘩は出来ませう。次郎松に、何でも喜樂さんは金を貰つたさか、借つたさか云うことだから、それであれ丈、義理にでも骨を折らんならんのだと、與三はんが云うてゐましたよ。事情を聞けば、喜樂はんの本當に可哀相なところがあるなア」

長吉「ナアニそんな事あるものか、河内屋奴が五人の乾兒を伴れて、あんな癡痴やみの次郎松さんごへ押よせて来たもんだから、今まで何回も喜樂さんが掛合つて居つただけれど、今度はたまりかねて應援に往つたのだ。河内屋も抜いた刀が鞘に納まりかねて困つて居つた所、わしの兄の勝ちやんか仲蔵に這入つて、ソレから又喜樂が

談判をして、次郎松から十五圓、河内屋から十五圓、勝負なしに、仲直りといふ相談が出来たのだ。一方は侠客の親分、一方は安閑坊の喜樂、そんな者と喧嘩をして五分々々の別れといふのだから、つまり河内屋が負なのだ。そこを喜樂が折角賣り出した河内屋の顔をつぶしては可哀相だと思つて、ズツと讓歩して五分々々といふ所で体能うキリをつけたのだよ。今夜の御馳走は三十圓の御馳走なのに、なぜ又これ程高いのだ。吉川の桑酒屋へ行つて五圓出しゃ、これ位の御馳走はしてくれろがお前ごこもチ、勉強せんと、商賣が流行らんやうになるかも知れんぞ」

お愛「ソラ又本當ですか？」

長吉「俺はウソ勝の弟だけれど、生れてから嘘坊主の頭とはいふたことがないのぢや」

お愛は顔色を變へて二階へトン／＼とあがり、

お愛「モシ河内屋の日那一寸……」

と目配せした。河内屋は「ウン」と云ひ乍ら、お愛のあとについて階段を降り、十分間計り姿を隠した。長吉は醉眼朦朧として階段を四つ道になつて二階へ上つて來た。そこへ勘公が顔色を變へて上り來り、

勘公「コリヤ長吉、今度の事件は貴様が起したやうなものだ。俺たちや、喜樂さんや、松さんがまだこゝに坐つてゐるのに、貴様勝手に席を外すといふ事があるものか。仲直りの儀式を破り、侠客の顔へ泥をぬりやがつた。オイ與三、徳、長吉を引括つて、井戸端へつれて行き、ドタマから水を百杯ほぎかけてやれ！」

と口汚く罵り乍ら、酔ひつぶれてる長吉の頭や腰を荒男が力に任して、踏んだり蹴つ

たりし始めた。

喜樂「オイ河内屋、仲直りの盃がすんだ以上は、長吉がどこへ行かうと構はんぢやないか。長吉に悪い事があるのなら、後で何なつとしたがよかる。明日の朝までは俺は長吉の親兄弟から、身柄を預つてきたのだから、指一本支さすこたア出来んのだ」

勘公「許し難い奴だけさ。喜樂さんや次郎松さんに免じて今晩は許しておく。明日夜があけたら、俺の宅までキツミ出て来い」

長吉「済まなんだ。どうぞ勘忍してくれ。わしや別にお前の悪い事を言うたのぢやない。下の女中が今晚の御馳走は五圓がボチで十圓の御馳走だと言つたから、そんな筈がない、三十圓だと言つたのぢやから、氣を悪うせんどころへてくれ」

勘公「喧しいワイ、仲直りが済んでからゴテく吐すと、又一つ物言ひがつくぞ。サア早く貴様歸れ……喜樂さん、松さん、どうぞゆつくり機嫌を直して夜が明ける迄呑んで下さい。これから女を上げますから、前席が十圓、二次會が二十圓といふ段取にしてあるのなのに、譯もまかずに長吉がそんな事言ひやがつて、本當に仕方のない奴だ……オイお愛、貴様もよいかゆんに喋べつておけ、これから第三次會の注文をする所だ。仕様もない事いふもんだから、喜樂さんにも痛くない腹を探られ、男の面目玉をつぶしよつた」

と言ひ乍ら、最愛のお愛の横面をビシヤノノとなぐりつけた。お愛は「キヤツ」と悲鳴をあけて段階子をころけおち、庭に白い尻をあらはしたま、平太つてゐる。二人の女中はあわて、抱き起し、裏の別建の家へ連れて行つたやうである。

喜樂「君、僕は明日早く行かねばならぬ所があるから、二次會に列したいのだが、これで失禮する。どうぞ君たち、僕の代りに二人前飲んで十分騒いでくれ。松さんも長吉も連れて歸るから……」

勘公「御用があらば仕方がない。そんならあと二十圓がこころ、君の代りに散財をする。」

オイ與三、徳、兼、下へおりて注文して來い」

勘公の意中を知らぬ三人はあわて、下に飛びおり、此家の主婦をつかまへて第二次會の注文をして居る。喜樂外二人は此處を立出で、穴太さして夜の道を歸つて行く。何時勘公の手下の奴が先まはりをして、こんな事をするか知れないと云ふ氣が起り、急いで歸らんとすれ共、痲病やみのヒヨロ／＼男が酒に酔ひ、又長吉がへべレケに酔うてゐるので、同じ所許り蟹の様に歩いて居つて、根つから道がはか取らず、十時頃

に正月屋を立出で、わづか十二三町の松の下まで二時間計り費やして了つた。

(大正二一、一〇、八、英八、一八、松村眞改註)

瑞 月

震災後きつく瘡せたる印紙かな

第五章 松の下 (二〇一七)

九月廿五日（九月廿五日）の月（月）は東（東）の山（山）の端（端）を掠（掠）めて昇（昇）つて居（居）る。されど満（満）大雲（大雲）に包（包）まれて居（居）る事（事）とて、只東（只東）の山（山）の端（端）が薄（薄）明（明）かくなつて、丁度（丁度）月（月）の出（出）る時（時）刻（刻）だから、彼（彼）れが月（月）の光（光）だらうと領（領）かれる位（位）であつた。若（若）し宵（宵）の口（口）に東（東）が薄（薄）明（明）かるといふならば、決（決）して月（月）・思（思）ふ事（事）は出来（出来）ない位（位）なものであつた。星（星）の影（影）もなく咫尺（咫尺）暗（暗）澹（澹）として、六尺（六尺）幅（幅）の道（道）を泥（泥）醉（醉）者（者）二人（二人）の千鳥（千鳥）を伴（伴）ひ、松（松）と櫻（櫻）との古木（古木）が抱（抱）合（合）ふて立（立）つて居（居）る「松（松）の下（下）」といふ、淋（淋）しい處（處）にやつて來（來）た。

そこには豚（豚）小屋（小屋）の様（様）な一軒（一軒）屋（屋）があつて、嘘（嘘）勝（勝）の親戚（親戚）なる嘘（嘘）鶴（鶴）といふのが、四五人（四五人）暮（暮）して任（任）んで居（居）た。現（現）今（今）では道（道）路（路）が擴（擴）張（張）されて、家（家）のあつた處（處）は坦（坦）々（々）たる街（街）道（道）になつて

居（居）る。嘘（嘘）勝（勝）は河（河）内（内）屋（屋）の舉（舉）動（動）に不（不）審（審）を起（起）し、いろ／＼と探（探）索（索）をして見（見）た結果（結果）、河（河）内（内）屋（屋）の一類（一類）が、此（此）嘘（嘘）鶴（鶴）の家（家）の半（半）丁（丁）程（程）東（東）の、樹（樹）木（木）茂（茂）れる暗（暗）い場（場）所（所）で、三人（三人）を叩（叩）きのめさうと企（企）んで居（居）る事（事）を悟（悟）り、密（密）かに山（山）へ登（登）り、手（手）の石（石）や割（割）木（木）を積（積）んで待（待）つて居（居）た。それとも知らず河（河）内（内）屋（屋）の一行（一行）六人（六人）は、沿（沿）傍（傍）の森（森）林（林）に先（先）廻（廻）りして、喜（喜）樂（樂）一行（一行）の歸（歸）つて來（來）るのを道（道）に要（要）撃（撃）せんと、待（待）ち構（構）へて居（居）たのである。

かゝる計（計）略（略）のありとは、神（神）ならぬ身（身）の知（知）る由（由）もなき三人（三人）は、暗（暗）の路（路）前（前）後（後）に心（心）を配（配）り乍（乍）ら、ヒヨロリ／＼トボ／＼と、三間（三間）山（山）の麓（麓）に着（着）しかゝる。忽（忽）ち現（現）はれた四五（四五）の黒（黒）い影（影）、矢（矢）庭（庭）に次（次）郎（郎）松（松）の頭（頭）を、棒（棒）千（千）切（切）れを持（持）つてカーンと音（音）かする程（程）殿（殿）りつけた。次（次）郎（郎）松（松）は驚（驚）いて高（高）岸（岸）から滑（滑）りおち、稻（稻）葉（葉）の茂（茂）みへ身（身）をかくし、翠（翠）丸（丸）を泥（泥）田（田）に没（没）して震（震）ふて居（居）る。長（長）吉（吉）は「アイタ、」と倒（倒）れた。喜（喜）樂（樂）は直（直）に山（山）を目（目）蒐（蒐）げて二三間（二三間）はかり駈（駈）登（登）る。

四五の黒い影は長吉に群かり集まつて、踏んだり蹴つたり、やつてる最中に、山の十間ばかり上から割木の串、栗石の礫の霰が降つて来る。此黒い影は勿論勘公の一隊である。流石の勘公も石にうたれ、割木にあてられ、這うぐの體にて一目散に闇の路を駆け出した。

長吉は悲しげな聲で、

長吉 「オーイ、喜樂さん、次郎松さん……」

と叫んで居る。喜樂は其聲を聞いて

喜樂 「長吉はやられたと思ふだが、彼んな聲が出る以上はまだ生きて居るのか」

と稍安心して山を下りかけた。暗がりから

「アハ、ハ、」

と笑ふ男の聲、訝かり乍ら近寄つて見れば、長吉の兄の嘘勝であつた。喜樂は

喜樂 「オイ、其聲は嘘勝じやないか」

と聞いて見る

嘘勝 「ソウじゃ、嘘勝じや、アハ、ハ、」

と又もや笑つて居る。

此男は嘘が上手で、人から嘘勝と仇名をつけられ、それが遂には通用語になつて了ひ、嘘勝と云はれるを却て名譽に思つて居る位な男である。其叔父も亦嘘勝といつて嘘をいふのを得意がつて自慢して居る男である。何事を掛合ふのにも、自分から嘘つきと云ふ事を承認し、人も亦認めて居ると思つてか、一つ話をする度に「今度は嘘じや無いぞ」と前置をする癖がある。それでも八九分は嘘だから堪らない。松の下に住ん

で居る嘘鶴と云ふ奴、五斗俵に糶の殻を充實し、それを叮嚀に締めて、何時も狭い家の庭に二十俵も積んで「米が十石、此通りあるんだが、もちと値が出んで賣れんのだ。之を抵當にチツと金を貸て呉れんか」と云つて金の融通を妙にする男であつた。人が一寸俵に觸らうとするに「オイコラ、之に觸つてはならぬぞ、觸り三百圓の罰金だ」といひ、鼠が喰ふといつて、柵を一面に刺して居る狡い男である。其血統を受けた勝公も長吉も、相當に嘘は上手であつた。然し乍ら不思議な事には、比較的村人の信用を受けて居る、天下御免の嘘つき男である。

却説、長吉は嘘勝の出現に力を得、暗かりに裾をバタ／＼と拂ひ乍ら、

長吉「喜樂さん、如何も俺は慙にも徳にも代へられんワ」

と三才兒の様な言葉で嘘聲を洩らし、頻りに袂や裾を泥がついたと思つて、かゝばた

きして居る。長吉の疵は別に血も、です、團扇が三ツ四ツ出来た位ですんだ。次郎松は三人の騒ぎ聲を聞いて、やつと安心したと見ゆ、水田の稻の中から白い頬冠をバツと現はし

次郎松「ホイイ／＼」

と力の無い聲で呼んで居る。

喜樂「次郎松さん、嘘勝が出て助けて呉れたのだから、安心しなさい。河内屋の一隊はとうに逃げて了ひよつた。早く上つておいで……」

と叫んで居る。次郎松は田の中から

次郎松「モウ、事ア無からうかな」

と云ひ乍ら、ズク／＼の身体で高岸を這ふて、街路まで登つて來た。

何時の間にか東半天は青雲の生地をむき出し、下弦の月は細い光を地上に投げた。鹽勝は本街道を左にどり、河内屋の様子を探るべく歸り行く。三人は道を右にどり、細い野道を渡つて松原に出て、暗い藪小路を潜つて、淋しい妖怪の出ると云はれて居る坊主池の邊りに辿りつき、又もや野道を渡つて漸く家路に歸つた。

斯う云ふ事が何回も重なり、河内屋や若錦の身内から敵視されて、八九回も大喧嘩が始まり、何時も喜樂は袋叩きにやられ勝であつた。何時も叩かれもつて、心に思ひ浮かんだのは斯うである。

「何だか自分は、社會に對して大なる使命を持つて居る様な氣がする。萬一人に怪我でもさせて法律問題でも惹起したならば、將來のためにそれが障害になりはせないか？」

と云ふのが第一に念頭に浮かんで來た。其次には

「人に傷つけたならば、屹度夜分には寝られまい。自分は何時も眞裸になつて、石だらけの道で相撲をこるが、力一杯張りきつた時は、如何な處へ眞裸で打ち投げられても少しも傷もせぬ、痛みもせぬ、之を思へば、全身に力を込めてさへ居れば、何程叩かれても痛みも感じまい」

この念が起り、指の先から頭の先迄力を入れて、身体を硬くして敵の叩くに任して居た。……もう叶はん、謝まろか……と思つてる間際になると、何時も誰か出て來て敵を追ひ散らし、或は仲裁に入つて、危難を妙に助けて呉れた。それで

「人間と云ふものは、凡て運命に左右されるものだ。運が悪ければ疊の上でも死ぬ運がよければ、砲煙彈雨の中でも決して死ぬものではない」



と云ふ一種の信念が起つて居た。それ故人に頼まれたり、頼まれなくても喧嘩の仲裁がし度くなつたり、或時は

「思ふ存分大喧嘩をやつて……偉い奴だ！強い奴だ！……」と云はれ度い。さうして強い名を賣つて、假令丹波一國の俠客にでもよいからなつて見たい」

と云ふ精神が日に／＼募つて來た。其爲めに二月八日の晩にも、若錦一派の襲來を受ける様な事を自ら招來したのである。

\*\*\*

若錦一派に打擲され、頭を痛めて喜樂亭に潜んで居た處へ、母がやつて來て非常に悔まれる。暫らくすると八十五才になつた祖母が、杖もつかずに出て來られた。少し耳は遠かつたが、悪い事は何でもよく聞ゆる人であつた。何時も祖母は勝手藝をして

居られるのかと疑ふたが、實は、本當に聞かないのであつた。聞かぬかと思ふて、「お前、何と一言でも悪口を云はうものなら、本守護神が知つて居るのが、但は神様の罰なのか直に分るのは不思議であつた。氣丈の祖母は此場の様子を見てこり、諄々として喜樂に向つて意見を始められた。祖母の名は「うの子」と云つた。

祖母「お前は最早三十に近い身分だ、物の道理の分らぬ様な年頃でもあるまい。俠客だとか人助けだとか下らぬ事を言つて、偶に人を助け、助けたよりも十倍も二十倍も人に恨まれて、自分の身に災難の罹る様な人助けは、チツと考へて貰はねばなるまい。無賴漢の賭博者を相手に喧嘩をするとは、不心得にも物好きにも程がある。お前は何時も悪人を挫いて弱い善人を助けるのが、男の魂じやと云ふて居るが、六面八臂の魔神なれば知らぬ事、そんな病身なやにこい身体で居乍ら、相撲取や俠客

と喧嘩するとは餘り分らぬじやないか。今年八十五になる年寄や、夫に別れて間もない一人の母や、東西も辨へ知らぬ様な、頭是なしの小さい妹がある事を忘れてはなるまい。此世に神さんは無いとか、哲學とか云つて空理窟ばかり云つて、勿体ない、神々様を無い物にして、御無禮をした報いが今來たのであらう。能う氣を落ちつけて考へて呉れ。昨晚の事は全く神様の御慈悲の鞭をお前に下して、高い鼻を折つて下さつたのだ。必ず、若錦や其外の人を恨めてはなりませんぞ。一生の御恩人じやと思ふて、神様にも御禮を申しなさい。お前の實父は幽界から、其行狀の悪いのを見て、行く處へも能う行かず、魂は宙に迷ふて居るであらう程に、之から心を入れ變へて、誠の人間になつて呉れ、俠客の様な者になつて、それが何の手柄になるか」

と涙片手に慈愛の釘をうたれて、流石の喜樂も胸が張り裂ける様に思ふた。森嚴なる神應に引き出されて、大神の審判を受ける様な心持がして、負傷の苦痛も打忘れ涙に暮れて、兩親の前に手を合せ

「改心します、心配かけて済みません」

と心の中で詫をして居た。

老母や母は我家を指して歸り行く。あとに喜樂は只一人悔悟の涙に暮れて、思はず兩手を合せ、子供の時から神様を信仰して居乍ら、茲二三年神の道を忘れ、哲學にかぶれ、無神論に墮して居た事を悔ゆると共に、立つても居ても居られない様な氣分になつて來た。

夜は森々と更け渡る。水さへ眠る丑滿の刻限、森羅萬象寂として聲なき春の夜、喜

樂の胸裡の騒々しさ、警鐘亂打の聲は上下左右より響き來り、我身を責むる如くに感じられた。

「あ、今が善惡正邪の分水嶺上に立つて居るのだ。左道を行かうか、右道を行かうか」

と深き思ひに沈む。折しも忽然として、一塊の光明が身邊を射照らす如く思はれて來た。天授の靈魂中に閑遊する直日の御靈が眠りより醒めたのであらう。深夜つらく

「あ、我は誤解して居た。父ばかりが大切の親ではない、母も亦大切な親であつた。そして祖母は又親の親である。天地廣しと雖も親は一人よりない。斯かるかりきつた道理を、今迄体主靈從心の狭義に包まれて、勿体なくも母や祖母を輕んじて居た

のは、思はざる失敗であつた。父が亡くなつた以上は、もう如何な荒い事をしても心配する親はないと、任俠氣取りで屢々危難の場所に入出し、親の嘆きを今迄氣づかなんだのは何たる馬鹿者ぞ、何たる不孝者ぞ！ア、諺にも……いらわぬ蜂は刺さぬ……と云ふ事がある。なまじいに無頼漢位を相手に挑み争ひ、且つ挫かうとしたのは、餘り立派な行ひではなかつた。勘公が次郎松に二百圓の金を出ささうとしたのも之は決して人間業ではない。次郎松はとられねばならぬ因縁があつたのだ。蛇が折角、艱難辛苦して漸くに蛙を口にし、一日の餌にありついて甘く吞まうとして居る際に、人あり、其蛇を打ちたき、弱い方の蛙を助けてやつたなら、其蛙は大變に喜ぶであらうが、肝腎の餌食をとり逃した蛇は屹度其人を恨むであらう。掛け構へもない人の商賣を構ひ立てたと怒るのは、人間も同じである」

と云ふ様に考へて來た。本居宣長の歌にも

世の中は善事曲事行きかはる

中よぞ千々の事はなりづる

何事も世の中は正邪混交陰陽交代して成立するものである。別に人の商賣まで妨げなくとも、自分は自分の本分を盡し、言行心一致の模範を天下に示せば宜いのだ。自分に迷ひがあり罪があり乍ら、人の善惡を審く權利は何處にあらうか……

と思へば思ふ程、自分が今迄やつて來た事が耻かしく、且恐ろしき様な氣になつて來た。

……母は我子の愛に溺れて喜樂が悪いとはチツとも思はず、只父が亡くなつたから人を侮つて、自分の子をいちめるのみ思はれて居る様だが、父が亡くなつたの

は喜樂ばかりぢやない、廣い世の中には幾千萬人あるか知れぬ程だ。父が亡くなつた爲めに世間の同情をよせた人こそあれ、たゞへ自分の様に、一部の侠客社會からにせよ憎まれたものは少い、釣り鐘も搗く人が無ければ決して鳴らない、太鼓も撃つ人がなければ決して音はせぬ、之を思へば祖母の今朝の教訓は、眞に神のお諭しである。自分の心から親兄弟に迄迷惑をかけたか……

と思へば、懺悔の劍に刺し貫かれて五臟六腑を抉らる、様な苦しさを感じて來た。悔悟の念は一時に起り來り、遂には感覺までも失ひ、ボンヤリとして我と我が分らない様な氣分になつて來た。

此時美容山に纏まり玉ふ木花咲耶姬命の命として、天使松岡の神現はれ來り、喜樂即ち今の瑞月を、高熊山の靈山に導き修行を命ぜられた事は、第一卷に述べた通り

であるから、此處には省略して置きます。

(大正二一、一〇、八、舊八、一八、北村隆光録)

瑞 月

デンデン 蟲苦しき内 殻這ひ出し

第六章 手 料 理 (二〇一八)

喜樂の姿が、郷神社前の喜樂亭から二月八日の夜より見なくなつたので、母や兄弟は……大方女の所へでも憂さ晴らしに遊びに行つたのか、但は龜岡あたりへ散財に往つたのだらう……位に思つて氣にも留めなかつた。二日立つても三日たつても歸つて來ないので、ソロ／＼例の次郎松、其西隣のお政後家を始め、株内近所の大騒ぎになつて來た。

長吉と云ふ男が、龜岡の五軒町の神籬教院中井傳教といふ稱荷下の所へ參拜して、稱荷大明神の託宣を請ふと、傳教先生は白衣白袴に烏帽子を着し、恭しく天津祝詞や六根清淨の祝、心經などを神佛混交的に稱へ上げ、少時すると忽ち神靈降臨あり

「水邊に氣をつけよ、早く捜さないで生命が危い、此男は發狂の氣味があるぞよ」  
この御託宣を得て、あわて、歸り來り、池や井戸や川なきを探し廻れ共、少しの手係りもなかつた。

お政後家さんが株内のこと、て氣を揉み、宮前村の宮川妙靈教會所へ參つて神宣を請う所、西田清記といふ教導職の神宣に依れば

「言ひ交はした婦人と東の方へ向けて遠く駈落してる。併し一週間の内には葉書が出て來るから安心せよ」

この滑稽な神宣もあつたさうだ。お政後家さんは、又もや篠村新田の弘法大師を祀つて居る立枝のお地藏さんと稱する婆アさんに占つて貰つた所、

「此男は神かくしに會うたのだ。悪い天狗に魅まれたのだから、生命に別狀はない

が、法外れの大馬鹿者か、氣違になつて、キツミ一週間の後には歸つて來るから安心せよ」

この託宣であつたと云ふことだ。

次郎松さんは龜岡の易者の所へ行つて、判断をして貰つた所

「牧畜場の賣上金を一百圓計り持つて出て居るが、此奴は外國へ行く積りだ。思はぬ野心を起こして、朝鮮から滿洲に渡り、馬賊の群に加はる積りだから、一時も早く保護願をして、外國へ渡らないやうにせよ」

この途方もない判断であつたと云ふことだ。

人々の噂は……節季前だから支拂に困つて夜ぬけをしたのだろ。餘り金使ひが荒過ぎたから……などと云つて居る者もあり……〇〇の女と駈落をしたのだ。イヤ天狗

につま、れたのだ、發狂したのだ、狐狸にだまされて山奥へつれて行かれたのだ。河内屋の勘吉や若鐘がこわさに親を振捨て、さつかへ逃げたのだ、餘程不孝な奴だ、大馬鹿者だ、分らぬ奴だ、腰拔だ……さまち／＼に評議の花が咲いてゐたといふ事だ、喜樂の机の上に残してあつた一通の巻紙には、左の如き歌が記されてあつた。

我は空行く鳥なれや

遙に高き雲に乗り

下界の人が種々の

喜怒哀樂に囚はれて

身振足ぶりするさまを

われを忘れて眺むなり

けに面白の人の世や

されども餘り興に乗り

地上に落つることもがな

御神よ我れと共にあれ」

と毛筆で認めてある。何の意味だか誰も知る者はなかつた。

七日目の如月十五日正午前、宮垣内の伏家、問題の男喜樂は歸つて来た。家族の歡喜は云ふも更なり、株内近所の人々が、歸つたと聞いて追々つめかけて来る。死んだ者が冥途から歸つて来た様に珍しがつて

「コレ喜樂さん、お前はさここへ行つて来たのだ、さここを何をして居つたのだ、お前

の不在中の心配は大抵のことではなかつた」

とウルさい程質問の矢を放つて来る。一々應答してる日には際限がない。自分も何だか耻かしくなつて来たので

「神さんにつれられて、一寸修業に往つて来ました。何でも神界に大望があるさうなので……」

と云つたきり、あとは無言である。例の次郎松さんは口をきながらして揚面をしなから

「へん、人を馬鹿にするない。皆さん、眉毛に唾でもつけて居らんぞ、探時のお紋

狐につまゝれますぞ。田芋か山の芋か、蒟蒻か瓢箪か知らんが、餘程安閑坊……ちやない安本丹だ。そんなこと云つてゴマかさうも思つても、此松さんの黒い目で

一目睨んだら、イツカナ／＼外れはせんぞ、アハ、ハ、ハ、なまけ息子の俄狂言もモウ駄目だよ。こんな奴に相手になつて居るとしまひのはてにや尻の毛までぬかれて了ふ。險香だ／＼、皆さん氣を付けなさい」

と面を膨らし、半破れた疊を蹴つて足をひっかけ乍ら、スタ／＼と歸つて行く。

それから代る／＼四五人の親切屋が、何とかがんごか云つて忠告や意見をしてくれる。自分は神勅を重んじ、無言で聞いてゐる許りであつた。又何程辯解してみた所で神さまの御用で行つたなごを説いても駄目だからである。俄に腹の虫が空虛を訴へる自ら膳を取り出し、冷い麦飯を二杯許り矢庭にかき込んでみた。實に山海の珍味にまさる心持がした。

堤防の決潰したが如き勢で睡氣が襲つて来た……ねむたい時には馬に五十駄の金



もいや……といふ俗語の文句の通り、一切萬事の執着にはなれ、其ま、暗い部室の破畳の真中にゴロリと横たはつた儘、後は暫く白川夜舟で再び天國をさまようてゐた。其間の樂しさは、後にも先にもなき有様であつた。

十六日の午後二時頃になつて、漸く目がさめて來た。枕許には依然として四五人の男女が見舞に來て、いろ／＼の噂をし乍ら、介抱してゐた。目がさめて見ると随分きまりが悪い。忽ち産土の小幡神社へ無我無中になつて參詣し、其足で山傳ひに、父の墳墓へ小松を根曳きして供へに行つた。

後から見わかぐれについて來たのは、南隣の八田繁吉といふ三十男であつた。日のズツボリ西山に沈んだ頃、重い足を引ずつて不安の顔色をし乍ら伏家に歸つて來た。次郎松さんやお政後家がウルさい程つめかけて、いろ／＼と聞糺さうとする、自分は

首を左右にふつて、何にも答へなかつた。

翌十七日の早朝から、自分の體は益々變になつて來た。催眠術でもかけられた様に四肢より強直を始め、次いで口も舌もコワばつて動かなくなつた。最早一言も口を利くことも、一寸の身動きをすることも出来ぬ、生きた死骸の標になつて了つた。併し乍ら耳文は人々の話聲がよく聞けて居る。懐中時計の針の音までが聞ける位、耳文は鋭敏になつて居た。家族や株内の者がよつてたかつて、いろ／＼と撫でたりさすつたり、やいどを灸わたりしてゐる。

「今日で三日ぶり、鱧の様によう寝た者だ、よほぐれたぶれたと見ゆる、自然に目のさめる迄寢さしておくがよからう……」

と一座の相談がまじまつたのが自分の耳にはハッキリと分つてゐた。四日たつてもど

クとも體が動かぬ、眠からさめぬ。家族や株内の人々は、忽ち不審の雲に包まれて、俄に慌出した。……「モウ駄目だ。お参りだ。用意せなくてはならぬ……」

と松さんの言つた詞が瞬く間に擴がつて、見舞客の山を築いた。誰が頼んで来た者かお醫者さんの聲が聞えて来た。自分は醫者が来よつたなと思つてゐると、柿花の名醫で吉岡某といふ先生、叮嚀に脈をとる、熱を計る、打診、聽診、望診、問診、觸診と非常の丹精をこらし、

「實に大變な痙攣です。此強直狀態が此儘で今晚の十二時頃まで持續すれば、最早駄目です。体温は存して居りますから死んだのではない、つまり假死狀態でも云うのでせう。兎に角不思議な病氣です」

と頻りに首をつてゐる様子であつた。自分は病氣でも何でもありません、神界の修業ですと云つて、ガワをはね起き、皆の分らずやを驚かしてやらうと思つて、全身の根力をこめてきばつて見たが、ヤッパリ體はビクとも動かない、口もきくことが出来なかつた。お醫者さんの靴の足音が次第々々に自分の耳に遠く響いて来た。これで醫者の歸つたのだと感ぜられた。

轉輪王明誠教會所の齋藤といふ先生が、二人の弟子と共に、誰が頼んだ者が祈禱の爲にやつて来た。天津祝詞も神言も上げず、直に拍子木をカチ／＼と打ち

「惡きを拂うて助け玉へ轉輪王の命、一列すまして甘露臺、一寸はなし、神のいふこと聞いてくれ、惡きの事は云はんでな、此世の地と天とを形取りて夫婦を拵へ來るでな、これが此世の始めだし」

と唄ひ乍ら、大の男が三人、日の丸の扇を開いて拍子木をカチ／＼叩き囃し立てる。

祈つてゐるのか、踊つてゐるのか、チツとも見當がつかない。随分騒がしい宗教だなア……と思つて居た。齋藤先生は諄々として、十柱の神さまの身の内話を説いた末、「此病人さんは全く天の理が吹いたのだから、一心に天十柱の神さまを御願ひなされ」

と親切にくり返しく説きさとし乍ら

「又明日伺ひます」

と言葉を残して歸り行く。家内や株内の者が感謝して居る聲が聞けて居た。

法華經信者のお睦婆アさんが親切に尋ねに來た。そして「お題目が有難いから」と云つて喧しう「南無妙法華蓮經」を幾十回となく珠數を揉乍ら、繰返し稱へてゐる。そして頭、顔、手足のきらひなく、珠數で打つ、こする、撫でる、しまひの果には、

お睦婆アさん、妙なことを言ひ出した。

「コレ、お狐さんが黒さんが知らんが、お前さん一体何が不足で、この喜樂に憑きなさつたのだね。お不足があるならば遠慮なしに、トットと仰有れ。小豆飯か揚豆腐か、鼠の油揚げが欲しいのか、何んなつと註文次第拵へて上げませうから、それを喰つて、一時も早う肉體を残して山へ歸つて下さい。溢こうなさと、お題目で責ますぞや」

と云ひ乍ら、無茶苦茶に珠數で脇の下の肋骨をガリノ言はせ乍ら、コスリつけるのであつた。自分は心の中で……馬鹿者が寄つてたかつて、人を馬鹿にしやがる……と憤慨してゐた。

二十三日の早朝、京都の誓願寺の祈願僧が尋ねて來た。満るゝ者はわらしべ一本に

もたよろうとする。諺の如く、何でもかでも助けてやらうと云ふ者さへあらば、無暗矢鏢に引張込んで来る。此祈禱僧は皺枯れた聲で「南無妙法蓮華經」と幾回もくり返し次に心經を二三回許り唱へ乍ら、一人で拍子木を叩く、太鼓をうつ、まだ其間に鐘を叩く、汗みぎろになつて勤行する、其熱心さ實に感謝に價すると思つた。併し自分の耳がつんほになり相であつた。これ程喧しう騒がねば聞えぬとは、餘程耳の遠い佛さまだなア……と心の中で可笑しくて堪らなかつた。

拍子木打ち太鼓鐘叩き經を讀む

法華坊主の藝の多さよ

此坊さん次第に聲がかすり出し、御幣を手に持ち、又もや「高天原」に「六根清淨」の祝を上げる。俄に彼の身體はドスン〜と上下に震動し、稻荷下けのやう

な事を始め出した。そして狭い部室中をグルリ〜ところけまはり「ウン〜」と言ひ乍ら座に直り大聲を張り上げて

「われこそは妙見山の新瀧に守護いたす、正一位天狐恒富稻荷大明神なり、伺ひの筋あらば近うよつて願へッ」

どの御託宣であつた。一座の者は低頭平身、息をこらして畏まつてゐる。次郎松さんは容を改め兩手をついて

「有難き恒富大明神さまに御伺ひ致しますが、一体これは何者の仕業で御座いますか、さうぞ御知らせを願ひます」

恒富「これは今より三十年前、此家の株内に與三郎といふ男があつたであらう。其男に狸が憑いた。此家の者、其外近所の者が當家によつて來て、其與三郎に牡丹餅が出

来たから食てくれと言つて、こゝへ引よせた。與三は牡丹餅をよんでやろうとは有難い……といひ乍ら手をニユツとつき出した。近所のお睦婆アが、與三には古狸がついて居るから、此奴を追出した後でなくては牡丹餅はやらんぞ、與三に見せつけておき乍ら、狸退治だぞ云つて、青松葉に唐辛をまぜて、鼻からくすべ、與三の肉體まで亡くして了つた。其恨をばらすが爲に、與三の怨靈が自分についてゐた狸をお先に使つて、この息子をたぶらかし、腹の中に巢をくんで惱めて居るのだ。併し乍ら此恒富大明神の神力に依つて、怨敵忽ち退散さす程に有難く思つて信心致せ一時の後には與三の死靈も古狸もサツバリ降服するぞよ。ウツク」

と言つて正氣に返つて了つた様子である。これを聞いて居つた自分の可笑しさ。一座は此託宣を命の綱と信じ、有難涙にかきくれて、鼻を吸る聲さへ聞けて居る。併し乍

ら、一時間たつても、半日経つても、死靈も退散せねば、古狸も去なんぞ見れて、喜樂の體は依然として強直状態を續けてゐる。祈禱坊主は尻こそばゆくなつたを見、雪隠へ行くやうな顔して、何時の間にか、禮物を貰つた儘姿をかくしたやうな按配であつた。黄昏時になつて、又例の次郎松がやつて来た。

「あ、ヤツバリあの糞坊主も、尾のない狸だつた。とうとう尻尾をみられん先に逃げよつたなア、偉相に吐して居つた坊主の御祈禱も、恒富稻荷の御託宣も、當にならぬ嘘八百をコキ並べよつた。それよりも手料理に限る。第一此奴が墓へ参りよつたのがウサンぢや。キツミドブ狸がついてゐるにきまつて居る、昔の與三に憑いて居つた奴だろ。青松葉位でくすべた所で、此奴は餘程劫を経て、毛が四つ股になつてる奴ぢやから、中々往生は致すまい。七味や唐辛や山椒をまぜて、青松葉でくす

べたら往生するだろ。本人の喜樂は二三日前に死んで了うてゐるのだ。只狸の息で體がぬくい丈だ。……オイコラ狸さん、モウ駄目だぞ、覺悟はよいか、いっかけん  
に去にさらせ」

といひ乍ら、失敬千萬な足をあけて、自分の頭を蹴つたり、鼻を捻ちたりしてゐる。青松葉や唐辛の用意が出来たと見ね。次郎松は得意になつて

「オイたぬさん、これから七味や唐辛、山椒粒に松葉くすべの御馳走だ。サ、ドツトと遠慮なしに上つてくれ」

と迷信家が寄つて殺人の準備行爲をやつて居る。耳のよく聞ける自分は、モウ斯うなつては何所でない、全身の力をこめて起上らうとしたが、ビクともしない、口も利かない、次郎松はふちの缺けた火鉢に火をおこし、唐辛と青松葉をくべて、團扇で鼻の

先へ扇ぎこまうとしてゐる一刹那、母が

「松さん……一寸」

と何か頭の先で歎いてゐられる。そして母の目からおちた涙が、自分の顔をうるほはした其一刹那、さうこともなく、上の方から一筋の金色の綱が下つて來た。それを手早く握りしめたと思ふ途端に、不思議にも自分の體は自由自在に活動することが出来るやうになつた。一同は歡喜の涙にうたれてゐる。自分も復活したやうな喜びに充たされて居た。

(大正一一、一〇、八、書八、一八、松村眞澄録)

瑞月

農相々々を這ひ出したる田々蟲

蝸牛角上の小ぜり合から

國民が待ちに待ちたる普選權

また危しと空を仰ぎつ

風船の様にあやふい普選權

何處の鳩に落ちんとするか

第二篇 青垣山内 (一七九)

第七章 五 萬 圓 (一〇一九)

友人齋藤宇一の奥座敷を借つて、愈幽齋の修業に着手する事となつた。修業者は宇一の叔母に當る静子、及妹に當る高子(十三歳)多田琴、岩森徳子、上田幸吉其外二三人の者を以て、朝夕軒を流る、小川に水浴をなし、午前に四十分間づつ三回、午後にも亦三回、夜二回都合八回で、一日に三百二十分間、嚴格に修業した。そして瑞月は小幡川で拾つた假天然笛で、羽織袴を着し、極めて嚴肅に審神者の役を修するのであつた。

初めての審神者の事でチツとも様子は分らぬ。第一番に多田琴が神主の座に着くや否や、組んだ手を前後左右に振まはし、二十貫もあらうといふ女が、古い家の床が落



ちる程飛あがり出した。戸も障子も襖もガタ／＼になつて了つた。一週間程の後には餘りドン／＼飛上つた爲か。床が二三寸下がり、障子も襖もバタ／＼と獨りこけるやうになつて了つた。宇一は此時まだ二十二三歳、両親から苦情が起り、修業所をどこかへ移轉してくれとの命令を下された。

そうかうする内、多田琴が口を切り始めた。

「シ、白濁々々々々」

どいひかけた。審神者は始めての口切りで、肝をとられ、驚きと一つは始めて口の切れた喜びとで、愈幽齋修業も前途有望だと、知らず／＼に天狗になつて了つた。多田の神主は日一日と發動が烈しくなり、詞も圓滑に使ふやうになつて來た。其時の審神者としては大きな聲を出し、よく發動し、荒く飛上がる程わらい神が來たのだと信

じ、本當のしどやかな神感者を見ても、もごかしい様な氣になつて了つた。

多田琴に續いて又齋藤靜子の面相が俄に猛惡になり、組んだ手を無性矢鱈に震動させ、これ又ドン／＼と荒れ狂ひ出した。一人は大女、一人は三十になつても貰手のないといふ、四尺足らずのチンコさんである。それが一時に負ず劣らずドン／＼と飛上がり出した。靜子の姉を始め、養子に來た元市といふのは、宇一の両親であつたのが、靜子が神懸になつたので、俄に乗氣になり、修業場を移轉することを取消して貰ひたいと申込んだ。

多田の神主はソロ／＼大口をあけ、目の白玉に巴形の赤い模様が出来て、

「靜御前と義經辨慶、加藤清正とちらが偉い、此方は和田義盛の妻巴御前であるぞよ、其證據には此方の目の玉を見よッ」

と目を指し示す。初心の審神者は其目の玉をよく／＼見れば、まがう方なき一つ巴が  
両眼に眞紅の色を染出して居る。……………ヤツバリ巴御前ぢやあるまいかなア……………と思  
案してゐる。神主は審神者の頬べたをビシヤ／＼と殴り、

「馬鹿審神者の盲審神者、此方の正体が分らぬか。此方は勿体なくも、官幣大社稻  
荷大明神の眷族三の瀧に守護致す、白瀧大明神であるぞよ。サアこれからは此白瀧  
が審神者をしてやろう。其方は神主の座にすわれ」  
と腹鳴りつけた。靜子は又發動して

「おれは妙見山に守護いたす、天一天狐恒富大明神だ。見違ひ致すも、今日限り審  
神者は許さんぞ。ウン／＼、バタ／＼ドメン／＼」  
と小さい婆アが飛上る。今から思へば抱腹絶倒の至りだが、其時の審神者にとつて

は一生懸命であつた。笑ふ餘地も怒る間も、調べる隙もない。只始めて會うた發動状  
態、神の託宣、愈人間にも修業さへすれば、老若男女の區別なく、神通が得られる  
ものだといふ確信はたしかについたが、其外の事は一切耳にも這入らず、思ふ事もな  
かつた。只一心不亂に三週間の修業を續けて居た。

一週間程たつた時、修業者は一齊に口を切り、少女の口から

「チ、、、、、ツ、、、、」

と口を尖らし、組んだ手をヒヨイ／＼と動かし乍ら、喋り始めた。修業場は一切他人  
の近よることを禁じてゐたが、餘り大きな發動の響と神主の聲とに、近所の者が聞き  
つけ、次から次へと喧傳して、晝も夜も家のぐるりは人の山になつて了つた。

多田琴は……………白瀧大明神の命令だ……………と云つて、修業者を残らず引連れ、白衣に緋

の袴をうがち、一里餘りの道を白晝大手をふつて、

「家來ッ、伴して來い」

と云ひ乍ら、何だか譯の分らぬ歌をうたひ、足拍子を取り、外の修業者は其歌に合はして、石や瓦を叩き乍ら、テンツ／＼ツンツクツンなき言ひ乍ら、中村の多田龜の家へ行つて了つた。審神審は……コリヤ大變だ、一つ鎮めねばならん……と後追つかげようとする共、何如したものが、自分の體は數百貫の石で押へられたやうに重たくなつて、チツとも動く事が出来ない。止むを得ず、宇一は審神者代理となりて側にすわり、自分は惟神的に手を組まされ、瞑目してゐると、腹の中から丸いかたまりが二つ三つグル／＼と喉元へつめ上げ、何とも言はれぬ苦さであつた。三十分間息が切れるやうな目に合はされた揚句、

「此方は此肉體を高熊山へ導き、其靈魂を富士山へ伴れて行つた松岡天使である。

サアこれから本當の審神をさしてやらう。天下の萬民を助ける神の使は、餘程の修業を致さねば駄目だ。サアこれから此方の申すことをチツとも叛くでないぞよ」

と自分の口から言ひ出した。宇一は這ひつくばひ乍ら

宇一「恐れ乍ら松岡様に申上げます。私は皆一所に修業を致して居りますが、まだ一遍も手も震うた事もなし、皆の様に神様がうつて物を言うて下さりませんが、如何いふ譯で御座いますか。神さまさへ憑つて下さるのなら、どんな修業でも致しますから、どうぞ教へて下さいませ」

と頼んで居る。そうすると又神主の口から

松岡「其方は大体精神のよくない男だから、神が憑る事が出来んだ。三年や五年修業

したとて、其方は駄目だから、一層の事、審神者になつた方がよからうぞ」

字一 「神主にもなれない者が如何して審神者が出来ませうか」

松岡 「神がせいと云つたら、キツと出来る。神が其方の肉體を使つてするのだから。チツとも心配は要らぬ」

字一 「左様ならば御用を致します。不束な審神者で御座いますから、どうぞ宜しう御願ひ致します」

松岡 「ヨシ、此神主の肉體は其方の監督に任すから、よく氣をつけたがよからうぞ。何時夜分に飛出すか知れんから、氣をつけて居るがよい」

字一 「ハイ、有難う御座います。此度の一同の者の修業が済みましたら、其先は如何致しませうか」

松岡 「神が五萬圓程金をやるから、此穴太の或地點を買収し、大神苑を作り、神殿を拵へ、神道の本部を建て、布教をするのだ。何事も一々神の命令を遵奉せなくては駄目だから、そう心得たが宜からう」

字一は齋藤源次といふ人の東隣の紋屋の息子である。其父親が相場に祖先傳來の財産を殆どなくして了ひ、今や其邸宅までが危なく浮いてゐたのである。何時家も屋敷もどこへ飛んで行くか、流れるか知れぬやうな危険状態になつてゐた。今此松岡天使の五萬圓を與へるといふ言を聞いて、喉を鳴らし、元市が其場に飛んで来て、叮嚀に兩手をつき、

元市 「松岡さま、どうも有難う御座います。これでいよく御神徳が有りました。どんな事でも神さまの御用を聞きますから、早く五萬圓の金を下さいませ。何れ天から

降らして下さる譯にも行きますまい。相場に依つてども五萬圓儲けさして下さるのでせうなア」

松岡 「相場のことなれば此方は餘程不得手だ。坂井傳三郎といふ百年前に相場師が大阪に居つた。其の男は八十五萬圓の財産を残らず相場で負て了ひ、僅に残つた財産を、堺の住吉明神に獻上致し、其の神徳に依つて、今は住吉の大眷族大霜といふ天狗になつて、相場の守護を致して居るから、其神が今此肉體にうつる様に守護してやろう。それに聞いたがよからうぞ。松岡はこれで引取る。ウンくくく」

元市 「マアくくく一寸待つて下さいませ、モウ一言御尋ね致したう御座います」

といふのも一切頓着なしに、審神者の肉體を三四尺宙に巻上げ、ドスンと元の座に尻を叩し、パチツと目をあけて、元の喜樂になつて了つた。

これより元市夫婦は態度一變し、今まで「喜樂々々」呼びつけにしてゐたのが、現金にも「上田大先生様」とあがめ出して喋つた。宇一も親しき友人の事とて「オイ喜樂」なきと云うてゐるが、俄に爺に倣つて、「大先生」と言ひ出した。何とはなしにテレ臭いやうな氣がしてならない。

「どうぞ今までのように喜樂と云うてくれ」

と何程頼んでも、親子共に首を左右にふり、

「イエく減相もない、こんな立派な相場の神さまが御憑り遊ばす御肉體を粗末にしては、神さまに對し申譯がありません。どうぞ大先生と言はして下さり」

と金の慾に迷はされて、一生懸命に厭らしい程大事にし出した。

元市 「モシ大先生、最前神さまが仰しやつたやうに、俵の宇一が審神者を致しますから

大霜さんの神懸りを一つ願うて下さいな」

と頼み込む。喜樂は仕方がないので、東側の溝に身をひたし、體を清め、再び白衣に紫の袴を着し、奥の間に静座し、手を組んだ。又もや身体震動して、

大霜「われこそは官幣大社住吉神社の一の眷族、大霜天狗であるぞよ。相場の事なら何でも聞かしてやらう」

と大聲で怒鳴り立てた。元市は飛付くやうにして、頭を疊にすりつけ乍ら、膝近くまですり寄り、

元市「ハイ、有難う御座います。併し乍ら此通り門一杯人が聞いて居りますから、どうぞ低い聲で仰しやつて下さいませ。私も折入つて御願が御座いますから……」  
大霜小さい聲で、

大霜「ヨシ分つた、何んなつと聞いてやろう。大方五萬圓の金を相場に勝たして、くれいと申すのだらう」

元市「ハイ、御察しの通り五萬圓の金が必要が起りました。何とマアあなた様は、私の心を御存じで御座います。疑もなき天狗様、これから家内中が打揃うて、村の奴が何んど申さう共信仰を致しますから、どうぞ米の上り下がりやハッキリ知らして下さりませ」

大霜「ヨシ、俺は生前に於て坂井傳三郎といふ堂島の相場師であつた。相場場の爲に財産をなくした位だから、神界に於ても相場に詳しいので、其方面の守護を致して居る神だ。つまり言はず専門家だ、此方の負た丈の金は其方に勝たしてやつても、別に社會の科にもなるまい。五萬圓なぞとそんな吝嗇臭い事申すな。八十万圓勝たして

やろう、どうぢや嬉しいか？」

元市 「ハイ、嬉しう御座います」

大霜 「其八十萬圓の金を手に入れたら如何する積りだ」

元市 「ハイ、申す迄もなく、曾我部村を全部買収し、五萬圓がそこ林を買うて、其處を天狗さまの公園となし、残り七十五萬圓はマア一寸考へさして頂きませう」

大霜 「七十五萬圓の財産家となつて羽振を利かす考へだらう。其方は其金が手に入つたならば、立派な家を建築し、妾をおいて、榮耀榮華に暮さうといふ、今から考へを持つて居らうがなア。餘り贅澤になると酒色に耽つて衛生上面白くない、身体衰弱して短命になる。又女房のあるのに妾などを置けば、家内が常にもめる道理だ。一層の事、今の貧乏の方が却て幸福かも知れないぞ。そうなるも、却て神の恵が仇に

なるから、五萬圓丈にして置かうか」

元市 「メ、滅相な、神さまの言に二言はないと聞いて居ります。あなたこそ神さまとなれば、お金の必要は御座りませんが、肉体のある以上は金は必要です。七十五萬圓の内、十萬圓丈は私が頂戴致しまして、後の六十五萬圓は驛遞局へ預けたり、慈善事業に寄附したり、社會の爲に使ひます」

大霜 「それも結構だが、神さまのお道の爲に使はうといふ氣はないか」

元市 「ハイ、神さまの方は五萬圓御約束の通り、チャンとさまつて居ります」

大霜 「アハ、、、そんならそうでも宜からうが、相場をする基本金は如何して拵へるか」

元市 「ハイ御存じの通り、スツカリ貧乏を致しまして、最早一圓の金も貸してくれる者

「ありませんので、此資本を神さまの御厄介に預つて買して頂きたいもので御座います」

大霜 「よし、そんなら小判の埋蔵所を知つて居るから、それを其方に明示してやらう。誰にも言つてはならんぞ。乍併此金は山奥に埋めてあるから、其方が行かいても

此神主の肉體を使うて堀りにやらすから、二三日待つて居るが宜からう」

元市 「ハイ有難う、いくら隠してあるか知りませんが、一人では途中が危なう御座います。もし賊にでも出會うたら大變ですから、どうぞ私一人丈はお供にやつて下さいな」

大霜 「ならんく、其金は一寸百萬圓ばかり小判で隠してあるが、其方に其所在を知らずと、又悪い精神を出し、体主靈従におちてはならないに依つて、先づ一萬圓計り

資本に、此肉體に堀らしてくる。キツと従いて来る事はならんぞ」

元市 「そんなら俵の字一をお供をさしますから、それ丈許して下さい」

大霜 「イヤそれも成らぬ。此神主の肉體を神が勝手に使つて堀り出して来る。其方の心次第に依つて渡してやる」

元市 「ハイ承知いたしました。御安心下さいませ。メツタに慢心する氣遣ひは御座いません。ズント／＼心の底から改心を致して居ります」

喜樂は自分の腹の中から言ふ事を一々残らず傍聴し、又元市の言も聞いて可笑しく

てたまらず……ナアにそんな金があるものか……心の中で思つて仕方がなかつた。大霜 「神は最早引取るぞよ。此肉體を大先生と崇めて大切にいたせよ。ドス、ウン」



元市「あ、大先生、御苦勞はんで御座いました。さうぞ體を大切にして下さいや。大變な結構な御神徳を頂きました」

喜樂「私も聞いてみました、あんな甘い事大霜さんが言はれたけれど、嘘ぢやなか  
らうかと、心配でなりませんワ」

元市は首を左右に振り、

元市「大先生、そんな勿体ないことを言うもんぢやありません。天狗さんは一割正直な御方ですから、嘘を仰しやる氣遣は御座いません。アー之れで私の運も開きかけた」

とニコ／＼してゐる。

其日は何となく我家へ歸りたくなつたので、久し振りに自宅へ歸ることゝなつた。

(大正一一、一〇、九、舊八、一九、松村眞澄傳)

瑞 月

入超の聲聞く度に國民は

また巾着を締めんとぞする

日地月あつめて造る串團子

星の胡麻かけ喰ふワニ口

第八章 梟の宵企 (1010)

久し振りで自宅へ歸り、心もユツタリと宵の口から眠つて居た。俄に「オイノ」  
と自分の體を揺り起すものがある。屹驚して目を醒まして見れば誰も居ない。只老母  
や母や妹が、未だ宵の口とて眠りもせず、行燈の側で小説本を見たり、繪を廣げて  
見たりして居るのみであつた。俄に自分の體は器械の如く自動的に立ち上り、自然に  
歩み出した。靈に憑依された肉體は自分の意思では如何ともする事は出来ぬ。  
體の動くまゝに任して居ると、何時の間にか産土の社の傍の殿山と云ふ、小さい丘  
の山に導かれて居る。麓の下あたりから、圓い塊がゴロ／＼と音をさして、喉  
の近邊まで舞ひ上つて來たと思ふ刹那

「大霜天狗……」

と嗚鳴り立てた。自分は

喜樂 「モシ大霜さん、懸つて下さるのは結構でムいですが、さう苦しめられては堪りま  
せん。もつと樂に懸つて下さいませ」

大霜 「樂に懸つてやり度いのは神も同じ事だ。神だつて苦しいのだ。其の方はまだ疑  
心がとれんから、それで苦しまねばならぬ。早く改心を致して、神様の御用にた  
ねばなるまいぞ。高熊山の修業の事は覺わて居るか」

喜樂 「あんまり苦しうて、今の處では全然忘れて了ひました。何だか頭がボートとして  
分らぬ様になつて來ました。又ボツ／＼と思ひ出すだらうと思ふて居ます」

大霜 「これから元市に申した金の所在を、其方に知らすによつて、鶴嘴や鋤鏈を用意し

畚を一荷もつて奥山に行け。そこになつたら又此方が知らしてやるから……」

喜樂 「奥山の様な處へ一人行くのは困ります。字一でも連れて行きますか」

大霜 「馬鹿をいふな。あんな慾しい奴を連れて行かうものなら、神様の御用どころかみんな自分の所有にしてさふ。其方一人、神がついて居るから早く歸つて用意をせい。お前もやつぱり金は要るだらう」

喜樂 「私はもう神様のお道へ這入つたのですから、金の慾望はありません。金の事聞いでもゾツと致します」

大霜 「馬鹿云ふな。此時節に金がなくて神の道が擴まるか。家一つ建てるにも金が要るじゃないか、布教に歩いてても旅費が要る。又肉體も食はねばならず、着物も着なくてはならぬじゃないか。金に離れて如何して神のお道が擴まるか」

喜樂 「それもさうです。然し重たいものを澤山に持つて歸ると云ふ事は、暗がりの山道に困るじゃありませんか」

大霜 「俺が天狗の正体を現はして、重たければ俺が擔いで歸つてやる」  
と自分の口から云つたり、答へたり、自問自答をする事稍暫らくであつた。

斯う聞くに、矢張金が無ければならん様な心持になり、字一の來ん中に堀出して來うと思ひ、土運びの小さい畚を携へ、棕の杖、鶴背に鑓鎌、畚に小判一杯擔うて歸る様な心持で、宮垣内の伏屋をソツと抜け出し、前條から愛宕山麓、姥の懐、虎池、新池、芝ヶ原、砂止と段々進んで、高熊山の修業場を右手に眺め、猪熊峠をドン／＼登り、危険極まる打越と云ふ坂を上り、算盤岩を渡り、再び馬の脊の險を経て、奥山の玉子ヶ原と云ふ谷間へ進んで行つた。

そつと空春を卸し、山に腰掛け息を休め、天津祝詞を奏上し始めた。何だか知らんが其邊ぢうが眞黒氣になつて來た。谷の下の方から灰色の雲の様なもの、チク／＼と此方へ向ふて押寄せて來る様な氣分がして、何時の間にか手も足も震ふて居る。何とも云へぬ淋しい様な情ない様な氣分になり、假令一億圓の金があつても堀り度くもなし、欲しくもない、それよりも早く、自分の宅に歸り度いと云ふ弱い氣分が襲ふて來た。幸ひに東の空から、春の臘月が瘦た顔して昇つて來た。心の勢か、其邊あたりは何とも云へぬ淋しい、人とも虫とも獸とも見當のつかぬ様な、悲しい嫌らしい聲が聞けて來る。臍の下から又もや三つの塊がグレ／＼と動き出し、咽喉元へ舞ひ上る。又神懸りだなと思ふて居る。

「俺は大霜だ、サア此下に小判がいてある。此處を掘れ、鶴嘴を持って！」

と嗷鳴り出した。喜樂は命のまに／＼鶴嘴の柄を握ると、兩の手は鶴嘴の柄に食ひついた様に離れず、器械的に鶴嘴は、カチン／＼と動き出した。何程體がわらいから一休みしやうと思ふても、鶴嘴の柄が手に着いて離れず、勝手に鶴嘴は堅い土をコワン／＼とこつき出す。殆ど二時間ばかり土をこつては鋤鍬でかき分けさせられ、又鶴嘴で土をつまきては鋤鍬で掻き分け、又鶴嘴で土を掘り二尺ばかりの深さに四尺四方程掘らされて了ふた。腹の中から

大霜「大分お前も疲れただらう。神も餘程疲れたから一寸一服致す」

と云ふと共に、引着いて居た鋤鍬は手から離れた。殆ど十分間ばかり腰を打ちかけ掘つた穴を眺め

「こんな處何時迄掘つた處で何が出てくるもんか」

と心に思はれて仕方なかつた。腹の中から

大霜「オイ、喜樂、貴様はまだ疑ふて居るな。此處に金が無いと思ふか、神があるぞ申したら確にある。もう一息の辛抱だ。さうならば貴様の疑もとけるだらう。金光燦然として目も眩きばかりの、大判小判が無盡蔵に現はれて来るぞ。貴様はまだ銀貨や銅貨は見えて居るが、金は見た事はあるまい。ビツクリ致さぬ様に、先に氣をつけておく。シツカリ腹帯をしめてかゝるんだぞ。嫌さうにするぞ神が懲戒を致すぞよ。又喉をつめやうか」

喜樂「いやと何とも云つてるのじゃありません。神様の云ふ通りしるじやありませんか」

大霜「随分樂しみじやらうなア。何程貴様は金は要らんどヘラズ口を叩いても、其金が

隠してあると思へば、やつぱり心がいそぐするだらう。此金がありさへすれば、此世の中に苦勞も要らず結構に渡られるのだ。貴様は餘程果報者だ。サア早く鶴嘴を持って！」

と云ふかと思れば、自分の體は器械的にホイと立ち上り、矢庭に鶴嘴を握り、カチン／＼と大地をつき出した。堀つても／＼天然の岩ばかり二尺ほど下に並んでゐる。又一時間程堀らされたが、今度は一寸も堀れない。鶴嘴の先は坊主になつて了ひ一寸も利かなくなつて了つた。

喜樂「こんな岩ばかり、何時迄こついて居つても駄目でせう。誰か埋けたのなら岩蓋が出なければならぬ。此奴ア天然の岩に違ひありません。チツと處が間違ふてをるのじゃありませんか、もう慾にも徳にも此上働く事は出来ませんわ」

大霜 「アハ、、、腰抜けだな。そんな弱い事で如何して神様の御用が出来るか。地球の中心迄打ち抜く丈の決心がなければ、三間や五間堀つては小判の處へは届かんだぞ」

喜樂 「天狗さん、お前さん俺を騙したのだなア。あんまり殺生じやありませんか。金を欲しがつて居る元市には堀らさずに、金なんか要らんと云つて居る私を、此んな處へ連れて来て騙すとはあんまりです。サアもう私の肉體には置けません。早く出て下さい」

大霜 「何程出ねと云つても、お前の生命のある限り出る事はならんわい。本當は嘘だ、お前の心をためしたのだ。こんな處へ金があつて堪るか。アハ、、、」

喜樂 「こりや、と狸！人の體へ這入りやがつて、馬鹿にさらすも程がある。もう何を云

ふても俺の體にはおいてやらんぞ」

大霜 「貴様はまだ金が欲しいのか」

喜樂 「俺は一寸も欲しくないわい。天狗の奴が欲しいものだから俺を使ひやがつて、あてが外れたのだらう。あんまり馬鹿にすな、サア去にくされ」

と腹から胸を握り拳で力一杯叩いて見た。それきり腹の中の塊も舞ひ上つて來ず、佛が法とも云はなくなつた。斯うなるを俄に淋しくなつて堪らない。折角此處迄來て空奮を擔いで歸るのも態が悪いと、月夜の事で露をおびて光つて居る紫躑躅や赤躑躅を、ボキ／＼折つて一荷の花の荷を拵へ、そこへ鶴嘴や鋤鍬を隠し、離月夜をばやいたり、びくついたりし乍ら、漸くにして砂止迄歸つて來た。

其處にはハッキリ分らぬが二つの黒い影が腰をかけて、煙管煙草をスバ／＼やつて

居る。喜樂は心の裡で

「ハテナ、今頃にあんな處に男が煙草を吸ふて居やがる。ヒョツとしたら泥坊かも知れんぞ。もし泥坊だつたら、折角堀り出した小判を皆盗られて了し、生命まで奪られて了ふかも知れぬ。マア金が無うてよかつた。もし泥坊が何か渡せと云つたら此花をつき出してやつたら吃驚するだらう」

と思ひ乍ら、怕々一筋道を黒い影の處迄やつて來ると

「マア大先生、お目出度う！之から私が擔いであげます。實の處は大霜さんがきつう止められましたから、お供はしませんでしたが、一生懸命堀つてムつた時、一丁程側から見張りをして居りました。大分澤山堀れましたやらうなア。サア私が之から擔いであげませう。何分黄金、いふものは嵩の割合に重いもんだから……」

と欣々として、噪いでゐる。

喜樂「い、わ、そんなに重いものぢやありません。空奮と同じですから、此儘私が擔いで参ります。薩張り駄目でした」

元市「駄目でしたやらう。それはその筈ぢや。此處はマア駄目にして、此儘私の家へ歸つたら如何ですか」

喜樂「元市さん、みんな空奮で躑躅の花ばつかりです」

元市「上かわは躑躅でも宜いぢやないか、とれ私が擔ぎます」

と無理に棒をひつたくつて肩に擔ぎ

元市「あ、割とは軽い、これでも一萬圓位はあるだらう。空奮にしては大變重いから……」

喜樂「重いのは鶴嘴の目方じゃ」

元市「マア結構々々、假令少々でも資本さへあればよい。サア之から八十萬圓儲けて、

天狗さんの公園にかゝらう」

と欣々として我家へ歸つて行く。

それから後は元市親子の信用を失ひ、遂には修行場まで断られて了つた。不得已、

自分は自宅へ歸つて自修する事となつた。多田琴は中村へ歸つて奥山川の水に浸り御  
禊し乍ら、盛に鎮魂や歸神の修業を四五人と共にやつて居た。

(大正一一、一〇、九、舊八、一九、北村隆光録)

### 第九章 牛の糞 (11011)

齋藤元市氏は大霜天狗の託宣のがらりと外れたのに愛想をつかし、修業場を貸すこ  
とを謝絶し、それきり自分の方へは見向きもせなくなつたのみならず、「大先生」と  
暫く崇めてゐた喜樂に「泥狸、ド狸、野天狗、ド氣遣」と罵り始めた。そして自分  
の妻の妹チンコの靜子を、中村の修業場から引張歸り、園部の下司熊吉といふ博奕  
打の稻荷下けをする男の女房にやつて了つた。十三歳の高子の方は神懸りが面白いの  
で、中村の多田龜の内で修業をして居た。宇一は爺の目を忍んで、そろ／＼喜樂の宅  
へ出入りを始めた。そして神の道を覺束なけに研究してゐた。

奥山で失敗して歸つてから、五日目の夜さであつた。又もや大霜天狗さんが五日間



の沈黙を破つて、腹の中からグル／＼と舞ひ上り、喉元へ来て嘸なり始めた。喜樂はヤア又かこ、迷惑してゐると、雷のやうな大きな聲で

大霜 「此方は住吉の眷族大霜であるぞよ。男山の眷族小松林の命令に依つて、再びここに現はれ、其方に申渡すことがあるから、シツカリ聞くがよいぞよ。宇一は暫く席を遠ざけたがよからう」

宇一は審神者氣取りになり、

宇一 「コレ大霜天狗さん、餘り人を馬鹿にしなさるな。奥山に金が埋けてあるなんて、能うそんな出放題が言へましたなア、モウこれからお前の云ふとは一言も聞きませんで……オイ喜樂、チビシツカリせんぞ可かんぜ。お前の口から言うのぢやないか餘程氣を附けんぞ氣違になつて了うぞ。……オイ大霜、これでも神の申すことに二言

がないぞいふか。八十萬圓なんて駄法螺を吹きやがつて、俺たち親子を馬鹿にしやがつたな」

大霜 「八十萬圓でも八百萬圓でも其方の心次第で與へてやる。まだ改心が出来んから、誠のことが言うてやれんのだ。金の慾が離れたら幾らでも金を與へてやる」

宇一 「金の必要があるから欲しくなるのです。誰だつて必要のない物は欲しいことはありません、欲しくない金なら要りませんワイ。石瓦も同然だから、金を欲しがらん奴には金をやらう、欲しがる奴にはやらんぞいふ意地の悪い神がきこにあるか、チツと考へなさい。審神者が氣をつけます」

大霜 「そんならこれから神も改心して、欲しがる奴にチツと計り與へてやらう」

宇一 「ハイ、私は別に必要は無いませんが、内の爺は先祖からの財産を相場でスツクリ

無くして了つたものですから、親類からはいろくど攻撃せられ、あの養子はよういぢやない、わるうしだとい人に言はれるのが残念ぢやと悔んで居ります。餘り慾なとは申しませんから、元の身上になる所迄金を與へてやつて下さい。そしたら爺も喜んで信仰いたします。此頃は太霜さんが喜樂にうつつて騙しやがたを云つて怒つてゐます。それ故私も爺に内證で、斯うして神さまの御用をさして貰はうと勉強して居るのでムいます」

大霜 「お前は親に似合はぬ殊勝な奴だ、それ丈の心掛があらば結構だ。そんならこれから金の所在を本當に知らしてやる、決して疑ふではないぞ。先に騙されたから今度も嘘だらうと、そんな鏡を起さうものなら、又もや金銀の入つた財布が牛糞に化けるか知れんぞ、よいか」

字一 「決して神さまのお言を始めから疑うて居るのぢやムいませんが、此間の様に神様から間違はされると、又しても騙されるのぢやないかと、自然に心がひがみまして一寸計り疑が起つて参ります」

大霜 「それが大体悪いのだ。綺麗サツパリと改心をいたして、此方の申すを一から十迄信するのだぞ」

字一 「ハイ、一點疑をさし挟みませんから、お告げを願ひます」

大霜 「そんなら言つてやらう、一万兩でよいか」

字一 「ハイ、當分一万兩あれば、さぞ爺が喜ぶこつてムりませう」

大霜 「其一万兩を如何する積だ。天狗の公園を先にするか、自分の目的の相場の方にかゝるか、其先決問題からきめておかねば言うてやることは出来ぬワイ」

字一

「ハイ、そこは神さまにお任せ致します、御命令通りになりますから……」

大霜

「そんなら言つてやらう、よつく聞け！ 葦野山峠を二町許り西へ下りかけた所の道端の叢に、十萬圓這入つた大きな色の黒い財布がおちてゐる。それは鴻の池の番頭が京都の銀行から取出して、大阪へ歸る途中泥坊の用心にと、ワザと途を轉じて葦野山峠を越えた所、泥坊の奴、チャンと先廻りを致し、葦野山峠に待つてゐたそれとも知らず番頭は、百圓札で一千枚都合十萬圓持つて、葦野山峠をスタくく登り、夜の十二時頃通つた所を、泥棒が物をも云はず、後からグーイと引つたくり持つて逃げ様と致すのを、此大天狗が大喝一聲……曲者！……と樹の上から嗷鳴りつけた所、泥棒は一生懸命に逃げ出す、番頭は生命からくく能勢の方面へ逃げて行く。ア、大切な主人の金を泥棒に取られて、如何申譯があらう、一層池へ身を投げ

て申譯をせうと、今大きな池のふちにウロくしてゐる所だ、それをどうぞして助けてやらうと、此方の眷族を間配つて守護致して居るから、先づ今晚は大丈夫だが何れ彼奴は金が出ない以上は死ぬに違いない、それ故其方が其金を拾ひ、其筋へ届けたなら規則として一割は貰へるのだ、一割でも一萬圓になる、サア早く行び！」

字一

「それは何時賊が出ましたのでんいますか？」

大霜

「今晚の十二時頃に出たのだ」

字一

「一寸待つて下さい、まだ午後五時で御座います、日も暮れて居らんのに、今晚の十二時に賊が出たとは、そら昨夜の間違ひと違ひますか？」

大霜

「ナニ今晚に間違ない、神は過去、現在、未來一つに見え透くのだ。先に出て来る事を知らん様では神は申さんぞよ。サア早く行け、グックとして居ると番頭の毒

命がなくなるばかりか、十萬圓の金を又外の奴に拾はれて了へば、メツタに出て來る例がない」

字一 「葦野山峠は僅に一里計りの所です。今から行きましたら六時には着きます。六時間も待つて居るのですか？」

大霜 「オウそうちや、お前は肉體を持つた現界の人間だ、神界と同じ調子には行かんワ、そんなら十二時に賊が出て金を取るのだから、餘り早過ぎてもいかず、遅過ぎてもいかなから、此處を十一時半に立つて行け、そうすれば丁度都合がよからう」

字一 「最前申した様に決して疑は致しませんけれど、もし間違つたら如何して下さいますか？」

大霜 「間違うと思ふなら行かんがよからう、後で不足を聞くのは面倒だから。一層の事喜

樂一人行くがよい、一萬圓の謝金は其方の自由に使ふたが宜からうぞ」

字一 「もし大霜さん、此間の様に喜樂文が行きますと、不結果に了るかも知れません。私も一所に連らつて行つたら如何ですか？」

大霜 「それも宜からう。それまでに水を三百三十三杯頭からかぶり神言を五十遍上げよ、そうすればこれから丁度十一時半迄時間がかかる、それから行つたがよからう。神は之から引取るぞよ」

ドスンと飛上り、疊を響かせ鎮まつて了つた。字一は釣瓶に三百三十三杯の水をカブるのは苦痛で堪らず、小さい杓で、一杯の水を三しづく程酌んで「一つ二つ三つ……」と云つて三百三十三杯かぶる真似をしてゐた。祝詞も神言では長いと云つて、天津祝詞に代へて貰ひ、漸くにして五十遍早口に唱へて了ひ、

宇一

「サア喜樂、ソロ／＼行かうぢやないか。まだ九時過ぎだが、道々修行したりなんかしてもつて行けば、丁度よい時間になるよ。遅いより早いがまだだからな」

喜樂

「モウおかうかい、おれは何だか本當のやうに思はんワ、又此間の様な目に會はされるゝ馬鹿らしいからな」

宇一

「糞物にこりて膾を吹くとはお前の事だ、そう神さんだつて何遍も人を弄びになさる筈がない、疑ふのが一番悪い、何でも唯々諾々として是命維れ従ふと云ふのが信仰の道だ。そんな事云はずに行かうぢやないか」

喜樂

「餘り人に分らぬよにしてをつてくれ、もし失策つたら又次郎松さんに村中觸れ歩かれると困るからなア」

宇一は「ヨシ／＼」と諾き乍ら、早くも我茅家を立出でる。喜樂も従いて、田圃路

を辿り天川村を右に見て、出山を越え、上佐伯の御靈神社の森に辿りつき、森の杉の木に腰を打懸けて、夜のボヤ／＼した春風を身に浴び乍ら、眠たいのを無理に辛抱して、時刻の到るのを待つてゐた。

愈十一時を社務所の時計が打出した。

「ア、モウ十一時だ、早く行かう」

宇一は先に立つ。喜樂は後からスター／＼と險しき葦野山峠を七八丁計り登つて行く峠の茶屋に山田屋と云ふのがあつた。まだ時刻が早いので、一寸一服して行かうと、戸の隙から中を覗くと、此五六軒よりかない村の若い者が、まだ遊んでゐる。……コリヤ却て都合が悪い……と云ひ乍ら、峠の右側の松林に進み入り、暫く時刻の到るを待つてゐる間に、二人共グツスリ寝込んで了つた。

フツと先に目が開いたのは宇一であつた。

宇一「オイ喜樂、早う起きんか、今一寸道の方を覗いて居りたら、神さんの云ふたやうに、一人の黒い男が財布の様な者を擔けて通りよつたぞ。又其後へ二人の男が一町ほど離れて行きよつた。ヤツバリ神様の仰しやる事は違はんワ。丁度今頃は財布をボツタクられてる所だ。餘り早く行くに俺達が泥棒と間違へられて天狗さんに叱られては大變だから、ゆつくりして行かうだないか」

と小さい聲で囁く。喜樂の心の中は、八分まで信ぜられない、如何してもウツの様な氣がする。けれ共二分許り何とはなしに希望の糸につながれてるやうな氣がした。

そこで兩人は林の中から街道へ下り、峠を二町ばかり降つて見ると、一寸曲り途がある。こゝに間違ひないとよく目を光らして見れば、財布の様な者が黒く落ちてゐる

二人は一イニウ三ツで其の黒い物に手をかけると、財布と思ふたのは牛の糞の段塚であつた。

二人は餘り馬鹿らしいので、互に何とも云はず、まだ外に落ちてゐるに違いないと、汚れた手をそこらの草にこすりつけ拭き取り乍らガサリ／＼と草の中を捜してみた。こゝは常から牛車の一服する場所、路傍の草原に牛をつなぐ爲、ここにもかしこにも牛糞だらけである。……コラ此處ではあるまい……と又一町許り降り、そこから中捜してみたが、何一つおつてゐない。念入りに葦野峠の西坂五六丁の間を捜してゐる間に夜はガラリと明けて了つた。宇一は失望落膽の餘り、

宇一「オイ喜樂、貴様の神懸りはサツバリ駄目だ、今度は糞を掴ましやがつただないかクツ忌々しい、もうこんな事は誰にもいふなよ。お前は口が軽いから困る。そして

今日限り神懸りは止めやうぢやないか」

喜樂

「グツ／＼して居る。金の財布が牛糞になる。神さまが言ふたぢやないか。モウ仕方がない。これも修業ぢやと思つて諦めやうかい」

宇一

「サア早く歸なう、誰に出會うか知れやしない。餘り見つともよくないから……」  
と云ひ乍ら、力なげに兩人は穴太へ歸つて來た。

斯の如くして神さまは天狗を使ひ、自分等の執着を根底より拂拭し去り、眞の神柱としてやらうと思召し、いろ／＼と工夫をおこらし下さつたのだと、二十年程経つて氣がついた。それ迄は時々思ひ出して、馬鹿らしくつて堪らなかつたのである。あ、  
惟神 靈幸倍坐世。

（大正一一、一〇、九、舊八、一九、松村眞澄録）

### 第一〇章 矢田の瀧（10111）

葦野山峠の西坂でマンマと牛糞をつかまされ、阿呆らしくて堪らず、稍自暴自棄的になつて、二三日の間朝寝をする、宵寝もする、天津祝詞の奏上や、鎮魂歸神の修業は中止してゐた。そうすると三日目の晩、又もや臍下丹田から例のグル／＼が喉元へ舞ひ上り、

「アー／＼／＼」

と大きな聲を連發し、暫くすると、

「阿呆々々々々！」

と嗷鳴りつける。喜樂は思つた……本當に天狗の云ふ通り、阿呆も阿呆、圖なしの阿

呆だ。併し乍ら誰にも云はずに今まで隠してゐるのだから、大霜天狗無頓着にあんな聲で、葦野山峠の失敗事件を喋りでもせうものなら、それこそ親兄弟、近所株内の奴に馬鹿にしられ、神さまの齋壇も取除かれて了うに違ない、さうぞ大きな聲を出してくれねばよいがなア……心の中に念じてゐた。

大霜「コレ肉體、スツバ抜かうか、チツと貴様も困るだろ。さうせうかな」  
とからかひ始める。

喜樂「さうなつと勝手にしなさい。元の土百姓や牧畜業者になつて了ひます。却て素破ぬいた方が諦めがついて宜しい」

大霜「さう落膽するもんぢやない。まだお前は十分に身魂が研げて居ないから、モウ一度神が連れて行くから、水行をするのだ。小幡川原の水は體にしみ込んで垢がこれ

んから駄目だ。今度此方がよい所へ連れて行つてやるから、其用意をせい。草鞋や脚絆をチャンと拵へて、今晚の十二時に此處を立つ事にするのだ」

喜樂「又ウツを云ふのぢやありませんか？」

大霜「嘘も糞もあつたもんかい。モウ斯うなつた以上は何事があらうと神に任し、糞度胸を据わてか、らねば何事も成功しないぞ。あの位の事でフン慨しとるやうな事ぢや駄目だ」

喜樂「モシ〜天狗さん、お前さんは大霜だと云つて居られるが、違ひませう。さうも云ひぶりが松岡さんらしい」

大霜「松岡でも大霜でも構はんぢやないか、お前の魂さへ研けたら、のぢや。本當の守護神が分らんやうなこつては神社も駄目だ。本當は俺を誰だと思つてるか」



喜樂 「松岡さんにきまつてゐますワイ」

大霜 「よう當てた、本當は松岡だ。奥山へ金堀りにやつたのも、牛の糞を糺ましてやつたのも皆此松岡だよ、アハ、、、ウフ、、、」

喜樂 「馬鹿にしなさるな」

松岡 「馬鹿の卒業生を馬鹿にせうと思つても、する餘地がないぢやないか、エ、、、これからサア身魂の洗濯に連れて行かう。草鞋や脚絆がなければ下駄ばきでい、ワサア行かう」

と腹の中からさなると共に、喜樂の體は器械的に立上がり、庭の駒下駄をはいたまゝ、夜の十二時頃に自宅を立出で、小幡川を渡り、スタ／＼と穴太を東に離れ、重利の車清の側の橋を越え、藪をぬけ、一町許り進むと、自分の足は土中から生れた様にビタ

リと止まつて了つた。そこには田園に施す肥料をたくわへる糞壺があつて、異様の臭氣が鼻をついてゐる。腹の中から塊がクル／＼と又もや喉元へつきつけ、

松岡 「オイ肉體、眞裸になつて此糞壺へ這入り、身魂の洗濯を致せ！」

と嘔鳴り出した。體は自然に糞壺の方へ進んで行く。鼻が曲るほど臭うてたまらぬ。

喜樂 「コレ松岡さん、こんな所へ這入つたら尙汚れるぢやありませんか。綺麗な水で洗濯してやらうと言ひ乍ら、糞壺へ這入れとはチツと間違ぢやムいませんか」

松岡 「錆た刀を砥ぐ時も、生灰をつけたり、泥をつけたりする様に、お前のやうな製糞器は糞で研いてやるのが一番だ。糞より汚い身魂を持つてゐ乍ら、糞が汚いとは何を吐すんだ」

と大聲に嘔鳴り立てた。喜樂はビツクリして

喜樂 「ハイ、そんなら裸になつて這入ります。さうぞ大きな聲を出さんやうにして下さ  
い」

と帯を解かうとする。

松岡 「オイ待て、それさへ分ればモウよい。お前の體の機關だ、生宮だ。そんな所  
へ這入つて貰ふと俺も一寸困るのだ。アハ、ハ、ハ、」

喜樂 「私は元からの土ン百姓で、糞位は何とも思つて居りません。糞がなければ五穀野  
菜が育ちませんから、一遍這入つて見ませうか」

松岡 「這入るなら勝手に這入れ。其代り此松岡は只今限り守護致さんからさう思へ。あ  
とはもぬけのから、狸の容物にでもなるがよからう」

斯う言はれると何となしに未練が湧いて来る。松岡神が人の體へ這入つて、ウツ計

り言ひ何遍も失敗をさせよる仕方のない奴、こんな邪神は一時も早く退散させたいと  
思ふ事は度々であつたが、サテ之れ限り立退くと云はれると、何だか惜いやうな氣が  
して來るのが不思議である。

喜樂 「そんなら、あなたの仰に従ひます。サア是から美しい水の所へ連れて行つて下さ  
い」

松岡 「コレから一里許り東へ行くと、矢田の瀧というて東向きに落てる、形許りの瀧  
がある。そこで水行をするのだ、サア行け！」

と號令し乍ら、喜樂の肉體を自由自在に操つて、足早に硫黄谷を越へ、大池の畔を傳  
うて龜岡の産土矢田神社の奥の谷に導き水行を命じた。そして一週間の間毎夜此瀧に  
通ふ事を肉體に嚴命した。喜樂はそれより毎夜々々淋しい山路や池の畔や墓場を越へ

矢田の瀧へ通ふ事となつた。

矢田の瀧へ通ひ始めてから七日目、今晚が行の上がり云ふ時になつて、何となく心の底に恐怖心が湧いて来た。奥の間にかけてあつた大身鎧をひつさけ、十二時頃自宅を立つて、穴太の村外れ迄進んで来ると、自分の持つて居る鎧が心の勢か勝手に動き出し、リン／＼と唸り聲がして来る。鎧の穂先は夜でハッキリは見ねぬが、自然に曲り鎌首を立て、ゐる様な氣がしてならぬ。黒い古ほけた鎧を握つた積りであるのがいつの間にか太い蛇を握つてる様な氣がして来たので、麥畑の中へ矢庭に放り込み、車清の方へ向つて進みかけた。此鎧を棄て、から餘程恐怖心が薄らいで来た。

追々進んで硫黄谷の大池の側へ来て見ると、周圍一里もあると云はれてゐる山間の大池の中に二三丈許りあるうと思はる脊の高い、それに恰合した太さの、赤い丸顔の

男が深い池水に腰あたりまでつけて、バサリ／＼と自分の方を向いて歩いて来る様に見える。髪の毛は縮み上る、胸は動機が高くなる。一心不乱に「惟神靈幸倍坐世」を稱へ乍ら池端を東へ／＼と走り行く。此怪物はさうなつたが、後は分らなかつた。前方に當つて青い火が、いつも灯つてゐない所に見える。進みもならず退きもならず暫く途中に立つて思案をしてゐると體がオゾ／＼と慄ひ出す、益々怖くなつて来る、四方八方から厭らしい化物に襲撃されるやうな氣がしてならない。あゝこんな時に岡さんが憑つてくれるといふのにと思ひ

「松岡天狗さん、松岡さん」

と大きな聲で叫んでみた。自分乍ら聲は大きくても、其聲に波が打ち、ふるひが籠もつてゐた。かうなると自分の聲まで厭らしくなつて来る。怖いと思ひかけたら、如何

にも斯うにも仕方のないものである。……マア此處で暫く静座して公平な判断をつけねばなるまい……と道の傍の芝生の上に腰を下し、姿勢を正しうして両手を組んで見た。されき自分の體も腰も手も足も、骨なしの蛸のやうになつて、グラ／＼して一寸も安定を保つ事が出来なかつた。たつた一呼吸の中から、

「突進！」

といふ聲が聞けて來た。其聲を聞くと共に、俄に囊落付きに落着く事が出来た。そして心の中で……エーこれが靈學の修業だ、何れ靈界の事を研究するのだから、現界と同じやうな事では研究の價値がない、これが却て神さまの御守護かも知れぬ、今日は一週間目の修業の上りだ、高熊山の修業中にいろ／＼と靈界の事を見せて貰ひ、教へても貰うて居る。随分其時も厭らしい事や恐ろしい事があつた、これ位な事は靈界探

險當時の事を思へば、ホンの門口だ……と直目に省み漸く腰を上げて、青い火の方へ進んで行つた。布々火の側へ寄つて見れば青く塗つた硝子の行燈に火が點してある。途のわきがすぐ墓になつてゐて、今日埋けた許りの新墓に白い墓標が立つてゐる。氣をおちつけて見れば、龜岡の稻荷下けをして居つた婆アで、御嶽教の教導職を勤めて居た六十婆アが死んだので、此處に葬つたのだと云う事が白い墓標の文字で明かになつた。ヤツと安心して漸く矢田神社の境内にさしかかり、社前の水で體を清め、御社の前で天津祝詞を奏上し、瞑目静座なせして夜の明けのを待つてゐた。最早これから奥へ夜中に行く丈の勇氣が臆病風に誘はれて無くなつてゐたからである。

夜はホノ／＼と明けて來た。そこらの様子が何となく晝らしくなつたので俄に元氣を出し、細谷川を傳ふて、一週間歩き馴れた谷路を登つて行く。併し實際は夜が明け

てゐるのではなかつたと思はれ、再びそこらが薄暗くなつて来た。空を包んでゐた雲がうすらぎ、東の空から月が昇つたのが薄雲を通して光つたからであつた。二三町計り行つた所に、五十五六の骨と皮とになつた、瘦た可なり脊の高い婆アが、一方の手を前に出したり後へ引いたり、切りに木樵が前挽をひくやうな事をやつてゐる。……ハテ怪体な奴が出やがつた。夜が明けたと思へば暗くなつて来る。そこへ川に臨んで婆アが妙な手つきをして體を揺つて居る。此奴ア、ヒョツとしたら稻荷山の峰つづきだから、奴狐がだましてゐるのかも知れぬ。心よわくては駄目だ……と俄に空元氣を出し、婆アの近くによつて、一生懸命の聲で

「コラッ！」

と嘯鳴つて見た。婆アは此聲に驚いて、折角發動してゐた手をビタリと止め、腰を屈

めて、

婆「ハイ、あなたか知りませぬが、何か御無禮な事を致しましたかな。妾は樽幸の稻荷さんに信心をして居りまして、御台さんから神うつりの傳授を受け、今日で三年計り毎晩此處へ修業に来て居ります。おかげで右の手丈此通り御手うつりが出来出しました。モウ三年すれば又左の手に御手うつりがあり、それから胴うつり、頭にうつり、御口が切れるのが、マア／＼ザツと之から十年の修業で御座います。お前さんは此頃評判の高い、穴太の天狗さんちや御座いませんか」

喜樂「お婆さん、そんな年寄りがこれから十年も修行して居つたら、口の切れるのど死ぬのど一時になるぢやないか。モツと早う口の切れるやうにして上げやうか。私が修業さしたら、一週間にはキツと口を切つて上げる」

婆

「ハ、ハ、ハ、そうかが易く神様が憑つたり、口が切れるやうな事なら、此婆もこんな永い修行は致しませんワイナ。早う口の切れるやうな神は碌なもんぢやありません。

どうで狐か狸でせう」

と自分が豆狸にうつられて居乍ら、狐狸をくさしてゐる其可笑しさ。肥持ちが囊の臭を知らんのと同じやうな者だなアと思ひ乍ら、此場を立去らうとするに、婆アさんは又右の手を木こりが木を引くやうに動かせ乍ら、腰をキョクン／＼と揺り動かし、動かん方の手をニユツと前に出し、

婆

「コレもし穴太の天狗さん、どうで御世話になりますか、一遍樽幸の稻荷さんに伺うた上頼みますワ。此間西町の御臺さんが、樽幸の稻荷さんの弟子で居乍ら、餘部の稻荷さんの方へ肩替へしやはつたら、其罰で死なはりました。昨日葬式がありました

た。神さんの御機嫌を損ずると恐ろしいから、とつくり樽幸の稻荷さんに伺うた上御世話になりますワ」

喜

「樽幸の稻荷さんはキツと反對するにきまつてゐる。此方は天狗さん、そちらは黒さんだからなア」

婆

「コレ／＼、何といふ勿体ない事を仰有る。あの神さまは正一位天狐御剣大明神さまだ。一の峰に御守護遊ばすお山一の御守護神さま、勿体ない、黒さんぢやなご、狸にして下さうとは、罰が當りますぞね。そんな御方に御世話にならうものなら、どんな事が起るか知れませんか。モウ是ぎりお前さんも妾の事を忘れて下さい、妾も忘れません。妙な因縁の綱がからまる互に迷惑しますからなア。六根清浄々々々々南無妙法蓮華經……」

と一生懸命に唱へ始めた。喜樂はこゝを見捨て、二町計り上手の東向きの瀧へ行つて見ると、いつも餘り太くない瀧が一丈程落ちて居るのに、今日は又如何したものが、五六間こちらから瀧を見ると、眞白けの者が立つてゐる。朧月夜にすかし乍ら、瀧壺の前まで近よつて見ると、二十五六の女が白衣をつけて髪をふり亂し、瀧にかゝつてゐる。喜樂は神懸りと見て取り、

喜樂 「何神さんで御座いますか、お名を聞かして下さい」

とやつて見た。瀧にかゝつた白衣の女は兩手を組んだまゝ、頭上高く差し上げ、背伸びをし、少しく反り返つて

「カ松大明神……」

と甲聲で呟鳴つた。

喜樂 「カ松大明神とは何處の守護神ですか？」

女 「稻荷山、奥村大明神の御眷族、カ松大明神だ。此方を信仰致せば病氣災難一切をのがらしてやるぞよ。其方は穴太の天狗であらう。今日で一週間の修行の上り聞いた故、此肉體の外志ハルを此方が誘ひ出し、其方に面會させる爲に待つて居つたのだ。随分途中で怖かつたらうのう」

喜樂 「分りました、さうぞ御引取を願ひます」

女 「引取れと申さいでも、此カ松大明神はその心をよく知つてゐるから引取るぞよ。ウン〜……」

と云つたぎり、龜岡旅籠町の外志ハルと云ふ神懸りは正氣に歸つて了うた。

さうかうする間に夜はカラリと明け渡つた。二人はいろ〜と神さまの話をし乍ら

外志ハルの頼みに依つて、旅籠町に廻り、夫の筆吉といふに面會して、互に道の爲に助け合ふ事を約し、穴太へ歸つて來た。

(大正一一、一〇、九、舊八、一九、松村眞澄録)

瑞月

關東の地震に勝る人造の

地震治むる神の權力

### 第一章 松の嵐 (I O I I I)

一週間の矢田の瀧の行を終つてから、宮垣内の自宅に於て、喜樂は愈々神業に奉仕する事となつた。盲目や聾啞、リウマチ、其他いろ／＼の病人がやつて來て鎮魂を頼む、神占を乞ふ、何れも御神徳が彌顯だといふ評判が忽ち遠近に轟いて、穴太の天狗さんとか金神さん、稻荷さんなど、いつて、朝から晩まで參詣人の山を築き、食事する間もない位、多忙を極めて居た。

例の次郎松さんがやつて來て、祭壇の前に尻を捲つてドツカと坐り、大勢の參拜者の中をも顧みず、眞赤な顔して喜樂を睨みつけ

次郎松「コリヤ極道息子、貴様は又しても山子商賣をやる積りだな。ヨシ、今に化けの



皮はヒン割いて、大勢の前で赤耻か、して見せてやらう。それが貴様の將來のためにもなり、上田家の爲めにもなるのだ。株内や近所へよい程心配をかけさせやがつて、其上まだ狐使ひの真似をするとは何の事だ。何故折角こゝ迄築きあげた、見込のある牧畜や乳屋を勉強せんか。神さんの、占だの、譯の分らぬ出鱈目を吐しやがつて、世間の人を誤魔かし、甘い事を仕様たつて駄目だぞ、尾の無いド狐ごは貴様の事だ。貴様が本當に神様に面會が出来、又神様の教が伺へるのなら、今俺が一つ検査をしてやらう。万が一にも當つたが最後、俺の財産四百圓の地價を残りや貴様にやる」

と口汚く罵り乍ら、湯呑みの中へ何か小さい物を入れて、其口を厚紙で貼り糊をコテくそつけ、音をせぬ様に懐から出して前にソツと置き

次郎松「サア先生、イヤ極道息子、指一本でも觸る事はならぬ。此種此湯呑みの中に、こんな物が隠れ丈け這入つてをるか云ふ事を、貂眼通とか駒通とか云ふ先生、見事あて、見よ。これが當つたら、それこそ天が地になり地が天になる。お月さんに向つて放す弓の矢は中つても、こればかりは滅多にあたる氣遣ひはない。如何ですな、先生！」

と輕侮の念を飽迄顔面に現し、喜樂の顔を願をしやくつて睨めつける。

喜樂「俺は神様の誠の教を傳へたり、人の悩みを助けたりするのが役だ。手品師の様にそんな物をあてる云ふ様な事は御免蒙り度い。神さんに教へて貰ふた事はないから知りません」

次郎松はシタリ顔で、一寸舌を出し願を二つ三つしやくつて

次郎松「態ア見上れ、ド狸奴、到頭赤い尻尾を出しやがった。エー、おけい、此時節にそんな馬鹿の真似さらすと、此松さんがフンのぼして了ふぞ。オイ狸先生、腹が立つのか、何だ、其むつかしい顔は……残念なか、口惜しいか、早く改心せい、ド狸野郎奴！」

益々傍若無人の悪言暴語を連發する。喜樂はあまり次郎松の言葉が煩さくなつて來たので、一層の事、彼の疑心を晴らしてやらうと思ひ

喜樂「松さん、あんまりお前が疑ふから、今日一週だけ云ふてやるが……一錢銅貨を十枚入れてあるだらう」

側に聞いて居つた數多の參詣者は、各自に此實地を見て感嘆して居る。次郎松は妙な顔し乍ら、御叮嚀に喜樂の顔を又もや覗き込み、自分の右の手で自分の膝頭を二つ三

つ叩き、首を一寸傾けて

次郎松「ハア……案の定、狐使ひだ。やつぱり箱根山の道了權現のつかはしの飯綱をつかつてるのだな。一体そんな管狐を何處で買つて來たのだ。何匹ほご居るのか。そんなものでも一匹が一圓もとるか、一寸俺にも見せて呉れ、ホンの一寸でよい、大切なお前の商賣道具を長う見せてくれとは云はぬ」

と譯の分らぬ質問を連發する。迷信家ほご困つたものはない。

喜樂「神憑りの靈術によつて、透視作用が利くのだ」

と少しばかり靈魂學の説明を簡單に述べたて、見た。されど元來の無學者だけに、何をいつても馬耳東風、耳に入りさうな事はない。又もや次郎松は口を尖らして

次郎松「透視だか水篩だか、そんな事ア知らぬが、そこらに小さい管狐を放り出さぬ様

にして呉れよ。ヒヨツと取り憑かれでもしたら大變だ。皆さん用心なさい。此奴ア飯綱使ひだから、うっかりしてると憑ひられますよ。病人が來ると管狐を一寸除かして病氣を癒し、又暫らくすると管狐をつけて病人にして、何度も禮をとると云ふ虫の良い商賣を始めかけよつたのだ。何しろ近寄らんが何よりだ。別に穴太の村に喜樂が居つて神を祀らうが祀らうまいが、矢張お日さんは東から出て御座る。暗がりになるためしもなく、喜樂が神さんを始めてから、お日さんが光りが強くなつた譯じやなし、お月さんが毎晩出る譯でもないし、斯んな者に騙されるより早う皆さんお歸りなさい。こんな奴に眉毛をよまれ尻毛をぬかれて堪りますか。俺はきつてもきれん親類だから、第一上田家のため、又此極道の爲め、お前さん達の爲め氣をつける」

と口を極めて反對の氣焰をあける。然し參詣者は一人も消ねぬ。依然として鐵魂を乞ひ、伺ひを願つて喜んで歸つて行く。次郎松さんは翌日の朝早くから穴太の村中一軒も残らず、

「家の本家の喜樂と云ふ奴は、此頃飯綱を買ふて來て妙な事をして居るから、相手になつてくれるな」

と賃金不要の廣告屋を勤めて居る。次郎松は神の教を忌み嫌ふ惡魔の靈に憑依されて知らずくりに邪神の走狗になつて了つたのである。

其翌日大勢の參拜者を相手に、鎮魂をしたり神話を始めて居ると、俠客侯野の乾兒と自稱する脊の低い牛公がやつて來た。足に繻帶をして居る。

牛公「オイ、喜樂さん、随分お前の商賣もよう繁昌するね。俺は夜前一寸足に怪我をし

たのだ。何卒お前の鎮魂でか足痛みを止めて貰ひ度いものだ」

と横柄に手を拱き、座敷の真中にドスンと坐つて擲掬ひ初めた。元より怪我などはして居ないのだ。みな嘘の皮、萬々一喜樂が

「さうか、それは氣の毒だ」

と云つて直に祈願でもしやうものなら

「天眼通の先生が之が分らぬか、怪我も何もして居ない、嘘だぞ」

と云つて大勢の中で笑つたり、ねだつたり、困らしたりしやうとの悪い企みで來て居るのである。若し喜樂が

「お前は疵も何もして居ない。そんな事をして俺をためしに來て居るのだ」

と云へば、自分の指の下に隠した小刀で縋帯を解き乍ら一寸足を切つて血を出し

「これや、これ丈け血が出て居るのに怪我して居ないとは何の事だ。ド山子奴！」

と嗷鳴り立てあやまらして、酒錢の一圓も取つてやらうとの算段をして居るのだと見てとつた喜樂は、牛公の言葉を耳にもかけず放擲つて、素知らぬ顔で數多の參詣者に鎮魂を施して居た。

牛公は喜樂の態度が餘程癪に觸つたと見ね、狂ひ獅子の様に暴れ出した。忽ち先祖代々から家の寶としてゐる、虫喰だらけの眞黒氣の障子の桁を滅茶苦茶に叩き破る、戸を蹴破る、火鉢を蹴り倒すと云ふ大亂暴をなし乍ら、再び座敷の真中にドスンと胡座をかき

牛公「こりや安閑坊の喜樂！ これでも罰をようあてんか、腰抜け神の鼻垂れ神じやなそんなやくざ神を祀つてる貴様は、日本一の馬鹿野郎だ。今此牛さんが神床に小便